Bull. Nat. Hist. Mus. Inst., Chiba－Humanities－
13(1)：1-81. December 2012

千葉県立中央博物館研究報告　－人文科学－
13(1)：1-81. 2012年12月

調査報告

梵天に見る房総の出羽三山信仰の現在（いま）

小林裕美

千葉県立中央博物館
〒260-8682　千葉市中央区青葉町955-2

はじめに

平成23年度企画展「出羽三山と山伏－はるかなる神々の山を目指して－」において、筆者は県内の出羽三山講の方々が製作する梵天の収集を任された。平成22年秋から情報の収集を始め、最終的には県内各地から33地区のご協力を得て、34組（今津朝山から２組出展）の梵天を「房総の梵天大集合」のコーナーに展示させていただくことができた。その梵天の形には同じものが２つとなく、行事の行い方もさまざまであり、もとは出羽三山の御師が布教したひとつの信仰から出たものであろうに、それぞれの地域に定着し、毎年繰り返されていくなかで変容をし、そして今、このようにしてある在り様は、たいへん興味深く感じられた。また、梵天を作ってくださった方々の、出羽三山や講行事への思いの篤さに感銘を受けることが多く、地域における信仰の意義についてもあらためて考える機会を得、今回知り得たことを記録しておかなければとの思いが強くなった。

房総の出羽三山信仰は、多くの先学が取り組んできたテーマである。今回は限られた時間のなかで、また梵天収集という目的のもとに行った調査であったため、内容に不十分な点や偏りがあり公表することには躊躇も感じるが、ほぼ同時期の、県内33か所における出羽三山講の情報というのは、なかなか得がたいもののようにも思う。あわせて調査の過程で気づいたことを覚書として記しておく。今後の研究の進展に、少しでも寄与することとなれば幸いである。

房総の出羽三山信仰と梵天

千葉県の出羽三山信仰について、すでに宮本袈裟雄、岡倉捷郎、對馬郁夫、立野晃をはじめとした多くの先学諸氏による研究の成果があり、『千葉県史』では「通史編近世２」と「別編民俗１（総論）」に取り上げられている。当館が事務局となって作成したDVD「房総の出羽三山信仰」の解説書に寄稿いただいた松崎憲三、菅根幸裕、木原律子、地引尚幸、宮本敬一の論考にも、興味深い新たな知見が示されている。また岩鼻通明が東日本一帯に分布する出羽三山信仰圏を３つの圏域に分類した成果は、房総の信仰を考える際にひとつの視点を与えてくれる。

ここで出羽三山信仰とは何かと、私があらためて記すのも憚られるが、予備知識なくこの小稿に接する方のために大要を記すと、下記のようになろうか。

出羽三山とは、山形県のほぼ中央に位置する羽黒山・月山・湯殿山の３つの山の総称で、農耕の恵みをもたらす山であるとともに、先祖の霊が集まる場所であり、先祖の霊をなぐさめ供養する山だといわれる。また、羽黒山の本地仏は正観世音菩薩で、ここで現世の安穏を祈り、月山には阿弥陀如来がおられ、死者の魂がおもむく場所であり、そして湯殿山は大日如来がおられる生まれ変わりの霊地だとされる。三山をお参りすることによって、先祖を供養するとともに、生きながらにして現在・過去・未来を体験し、穢れに満ちた身をいったん捨て、新たな命をいただいてよみがえることができるといわれる。関東地方には江戸時代中期以降、羽黒修験の山伏によって信仰がひろめられ、特に千葉県は現在も活発な講活動が行われている地域として知られている。「男は一生に一度は三山に行くもの」との意識が根強くあり、また登拝経験者（行人・ぎょうにん）で構成される「三山講」「奥州講」「八日講」などと呼ばれる講が、地域の安寧や豊作などを祈願する行事を行い、また行人仲間の葬式に関与している。

出羽三山の講が行っている行事を拝見すると、揃いの白装束、首にかけられた袈裟、法螺貝など三山信仰に特徴的なものの数々に気付くが、なかでも印象的なもののひとつに梵天がある。梵天は、それぞれの講で出羽三山信仰の象徴のように作成されており、神がおりる依り代として、また場合によっては行人の身代りとしての意味が与えられているように見受けられる。

この梵天が出羽三山信仰で重要な役割を果たしていることに注目し、梵天に関わる習俗を取り上げた論考が２つある。立野晃「出羽三山信仰におけるボンデンの諸相」、對馬郁夫「出羽三山信仰にまつわる梵天の諸相」である。立野は奥州参りの梵天、行（ぎょう）の辻梵天、葬送儀礼の梵天、そして梵天供養の腰梵天について紹介し、梵天が神の依り代としてあるだけでなく、そこに民間信仰的な諸機能が加えられていること、特に奥州参りや葬送の梵天、梵天供養の腰梵天が行人の霊の依り代となっていることを指摘している。また對馬は、梵天に出羽三山信仰が持つ修験道的な神仏習合の要素が投影されていることに着目し、梵天が用いられる様々な場面の解釈を試みている。

梵天の名称

そもそも梵天との名称はどこからきたのだろうか。その語源とされるブラーフマンはインドの古代宗教における世界の創造神であるが、仏教に取り入れられて梵天となり、帝釈天と一対で仏法の守護神とされたという。この仏教の梵天が修験道に取り込まれる過程で大型の御幣の名称になったものかと思われる。柳田国男は柱、あるいは目印を意味する「ホデ」がボンデンの起原で、梵天・帝釈天とは関係のない語だと断じている（柳田, 1915; 1942）のだが、私は、修験道において梵天・帝釈天の梵天の名を借りて大型の御幣を「梵天」と呼ぶようになり、梵天を連想させる柱状のものが、「ボンデン」転じて「ホデ」となったのではないかと感じている。柳田の論考の主旨は、梵天や柱松が「神の占有を表示する一種の齋串である」（柳田, 1915）こと、「日本の祭りは木を立てずして行ふものは今とても一つも無い」（柳田, 1942）ということにあり、梵天の名称に殊更こだわっているわけではないのだが、後続の事典類や研究がいずれも、柳田のホデを語源とする説を鵜呑みにしていることに、あえて問題を提起したい。なぜなら庄内地方のモリ供養などを見てもわかるように「梵天」と呼ばれる御幣には小さなものもあり、また山伏が首にかける結袈裟の６つの房は「梵天房」と呼ばれて六波羅蜜を象ったものだという（島津, 2005）から、梵天は必ずしも柱状のものとは限らないのである。房総の行人が初登拝の折に宿坊から受ける腰梵天（「剣梵天」「木剣（ボッケン・ボッケ）」とも）も、長さ３～40センチほどの木製のものである。次節でも紹介するように、出羽三山信仰においては天部の神々、なかでも梵天・帝釈天が重要な位置にあったように見受けられ、特に梵天（ブラーフマン）は世界の創造神であるところから修験道の本尊、大日如来に通じる。出羽三山信仰、ひいては他の修験道にも視野をひろげつつ「梵天」の意味と名称について検討する必要があるのではないだろうか。

梵天の意義

現在の羽黒修験では、秋の峰の峰入りにおいて先導役が梵天を奉じ、黄金堂で梵天奉納が行われる。また冬の峰では松聖（まつのひじり）が100日間の修行に入る際、それぞれの名前を記した梵天が斎館に立てられ、松聖を守るという。この梵天は12月28日から補屋（しつらえや）の前に移され、31日にはさらに大松明を立てる雪穴の脇へと移されて、新たな年へと移るころに大松明に放たれた火によって燃え尽きる。秋の峰・冬の峰における梵天は三十三天（忉利天）と五大尊をかたどるものであるという（鈴木, 2005）。三十三天（忉利天）とは仏教的世界観における欲界の第二天部、須弥山の頂上にあって帝釈天が支配するところであり、また五大尊は、不動明王を中心とした五大明王である。秋の峰で黄金堂に投げ入れられる大梵天は、イザナギ神にも見立てられ（鈴木, 2005）、あるいは宇宙の象徴で、父であり男根であるともされている。（島津, 2005）。これらは現在の羽黒修験で注目されやすいものであり、羽黒修験のコスモロジーの一端を表現するものとされている。また一方で、現在も湯殿山に行くと、参拝口にたくさんの白い梵天が立てられている。「社殿を持たない湯殿山の本宮は梵天に囲まれ守護されて」おり、「湯殿山信仰の象徴ともいえる」ものだという（出羽三山歴史博物館, 2009）。江戸時代から神仏分離を経て現在に至るまで、房総の行人たちの三山登拝の終局的な目的が湯殿山参詣にあったことを思うと、房総各地に伝わる梵天を考えるにはまず、「湯殿山信仰の象徴」だという梵天の持つ意味や位置づけを知ることが重要であろう。その手掛かりとして、県内の行人が伝えてきた資料から梵天に関わる箇所を紹介したい。

初めに、展覧会に展示された君津市俵田の飯田家に伝来する『湯殿山月山羽黒山行人次第記』『御湯殿山御縁起祭文禮拝之次第』を取りあげる。『行人次第記』は行屋のしつらえ方、行の行い方、何をどう作り、それにはどんな意味があるのかなど、行人の作法を詳しく示している。梵天に関する記事も多い。『禮拝之次第』は冒頭に３本の梵天の図が描かれ、続いて「三山祝言」などの唱え言が記されていく。『行人次第記』の奥付には万治３年（1660）に

武州川越で書かれたものを明和３年（1766）に写したとあり、一方の『禮拝之次第』には「此外ハ行人次第記有此書ニハ不写」とあり、筆跡も『禮拝之次第』の表紙の署名「飯田十郎兵衛」に一致する。どちらも明和３年に飯田十郎兵衛が写し、以来、俵田の飯田家に伝えられてきたものと考えられる。『神道体系』や戸川安章『出羽三山修験道の研究』などによると、「三山祝言」は「湯殿山法流」ともいわれる三山に共通する拝詞であり、またほかの作法や唱え言には「注連大事」「湯殿行火立略法」「注連之大事」「腰梵天之大事」「八将注連之大事」「別行言語之事」「三山拝所神仏名号」など、羽黒の一世行人が行った「湯殿行」に関する資料と共通する点が認められる。湯殿行（火注連・ひじめ）の根本道場は荒沢寺で、羽黒修験において最も大切とされる常火（じょうか）を管理する奥の院であるが、またその常火の根元は湯殿山の宝窟にあるとされ、湯殿山は羽黒修験にとって最も大切な霊場だったようである。千葉県の行人が親方を「火の親」とよび、別火精進を大切にしてきたことなども湯殿行に由来するのではないかと推測されており（島立理子氏ご教示）、湯殿行を深く知ることが、飯田家資料ひいては千葉県内各地に伝えられた出羽三山信仰への理解につながると思う。

飯田十郎兵衛が写した元の原本は、関東地方に布教に出た羽黒修験者が山形から持参したのか、川越に住んだ里修験が記したのか、またそれをどのような経緯で飯田十郎兵衛が写したのか、さらに俵田において、これら次第の内容がどの程度実施されたのか、すべてはよくわからない。ただし俵田で行人の指導者的立場にあったであろう飯田十郎兵衛が行の規範と考えたからこそ、書き写し、大切に持ち伝えてきたものなのだろう。

『行人次第記』の梵天に関する箇所を以下に書き出してみる。

［本文５丁裏から８丁表］

一　三本梵天大事　サマノ前ナトニ立ル

（三本梵天の図）

一　五本梵天之大事　八尺八寸

（五本梵天の図）

東方　帝尺天　本地薬師如来
南方　火天　　本地宝性如来
西方　風天　　本地阿弥陀如来
北方　福生天　本地釈迦如来
中天　水天　　本地土面薩埵

一　八丁神目（〆）天地陰陽ヲ合

（八丁〆の図）

守宅神　　東北方　毘沙門天
壇全白順神　東南方　持国天
九字神
迷人神　　西南方　増長天
愛敬神　　西北方　廣目天
言人神
貪欲神　　此四天王四方堅ル故也
土公神

八方ニ切入用之事口伝相伝

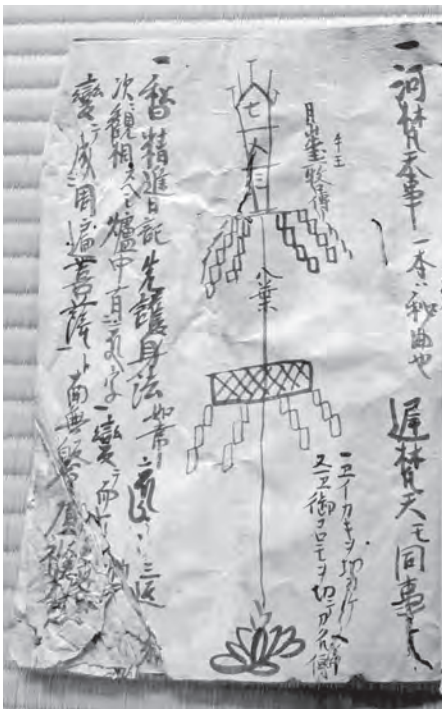
（八本梵天の図）

上方梵天本地降三世
下方本地不動明王
日天本地観音大士
月天本地勢至菩薩
アハラ

右四梵天大事四方ノ角ニ可立　此大事ハ行者信心アルヘシ　備ヘ供物ヲ申シ其内幡切リテ四方ニ鳥居ヲ立テ　其内五輪ヲ切テ　御幣ハ四垂レニ切リテ仏ノ形ヲカクスヘシ　是ハ行人ノ死タル時　壇ヲ築テ立ル右如是能々口伝多之者也

［本文13丁表］

一　河梵天事　一本ハ秘曲也　遅梵天モ同事



河梵天（『行人次第記』より）

（河梵天の図）
月山牛王一枚口伝
一エイカキ（斎垣）ヲ切カケ
又一エ御コロモヲ切テカクル伝
［本文14丁表・最終行から］
一　行屋造次第　土ヲ清メテ屋ヲ造リテ　御前ヲ土壇ニツキ　ツクエヲ立　大日ヲ勧請シ奉テ　金剛垣ヲシテ注連ヲ七重張也・・（中略）・・家ノ四方角梵天ヲ祝也 外八町注連張也
［本文15丁裏・４行目から］
一　（前略）・・行人死ヲハ ハハカラテ行人間ニテ取置ク也 壇ヲ築テ上ニ梵天八本立祝 其上ニ一切ノ道具ヲ納メベシ・・（後略）
（　）内は筆者による。

ほかに「梵天ノ木」を清め、梵天を「開眼」するときの唱えごとなども記されており（本文２丁表）、また『禮拝之次第』には冒頭に３本の梵天の図が描かれ、右に「報身　弥陀」、中心に「発身　大日」、左に「応身　釈迦」と書き記されている。

記述には特殊な用語が多く、帝尺（釈）天の本地仏を薬師如来としていることなど本地仏と垂迹神の対応も理解が難しく、また、現在羽黒修験の梵天があらわしているという三十三天や五大明王、また密教の十二天、金剛界や胎蔵界の五仏などで説明ができるようにもなっていない。とても私の力では読み解くことはできないが、次の点は確認しても良いのではないだろうか。

①梵天は３本ないし５本が基本の形となっている。
②「三本梵天」は大日、阿弥陀、釈迦を表し、それは仏の三身である発（法）身・報身・応身である。
③「五本梵天」は帝釈天をはじめとする５天５仏を表している。
④行屋を造るときには四方へ梵天を立てる。
⑤行人の葬式では壇を築いた上へ８本を立てる。
（８本の梵天の図と四方の角に立てたという「四梵天」の名称や説明がよく結びつかないようにも感じられるが、８本の梵天を「四梵天」と呼ぶと資料の表現どおりに読めば、葬式には８本の梵天を立て、そのうち四方の角に立てる４本が神仏を表しており、それゆえに名称が「四梵天」だと解釈することも可能だろう。）
⑥「河梵天」「遅梵天」は１本であり、「秘曲」とされる。神仏名はあてられていない。

立てる場面によって梵天の本数が異なり、それぞれの梵天が象徴する神仏も変わる。場の意味が変わるのだろう。現在、房総の梵天行事では、３本をひと組として、あるいは１本で、また５本や６本を記念碑の周囲に立てる場合などがある。葬式でも１本、３本、４本、５本、また７本か９本という例もある。飯田家文書には、本数の違いの本来の意味が示されており、現在の地区による本数の違いが、伝承過程による変化であることを示唆しているのではないだろうか。梵天行事の難解さが多様性の一因となったと思われる。

次に、市原市西青柳の八日講で今も唱えられている『御梵天由来』を紹介したい。房総には昭和50年ころまで仏式の行を連綿と行ってきた地域がいくつもあったようであるが、西青柳は今でも仏式の拝みを行っている。

夫れ御梵天の由来をくわしく尋ね奉るに金剛界胎蔵界両部の流れをくみ、頂上には三十六天を表し三百六十しだれの御注連を切り、ことに阿罵吽の三字を表し三尊ぐそく御幣を立て、五大尊明王勧請し奉る。御札には三山の梵字を鎮め中には白蓮華の手掛を握り、白たいしげんの糸筋を添え、地には小金の床をかざり石付と名付け、おのおの是をつく時は六時地中に曇なく、日々にさんげの文を唱え梵天幣帛を捧げ奉る。則、湯殿山大日如来と同体なり。諸人是を拝する輩は罪障を滅じたもんたたせ給ては、七難を逃れ家内鎮まる。時は七福かいらい神の御前にては自然幣帛と号す。仏の御前三悪道の罪を逃れ誠に帝釈天の御加護なり。（ひらがなに適宜漢字を当て、句読点を入れた。北青柳の行人、小倉澄夫氏が書き写した資料を参考にさせていただいた。）

梵天の注連が三十六天を、御幣が三尊をあらわし、梵天は五大明王を祀るものであるとする。そして梵天を祀るときに行人は湯殿山の大日如来と一体となって様々な罪障を滅すことができ、それは帝釈天の加護によるものだと伝えている。「三十六天」は三十三天（忉利天）が口伝により変化したもので、また「三尊」とは仏の三身である大日如来、阿弥陀如来、釈迦如来が本来の意味であったかもしれない。ただし実際には、現在西青柳で作成されている梵天に36の注連にあたるようなものはなく、型紙にあわせて切れ込みをいれた垂れ紙を３枚、藁ヅトに巻いて下げているが（葬式では４枚）、その意味は伝えられていない。また垂れ紙の上に施すひも結びは人の姿を象っており、また梵天の頭には羽黒山・月山・湯殿山をあらわす紙が差し込まれている。梵天は三山の象徴であるとともに、行人のヒトガタとも考え

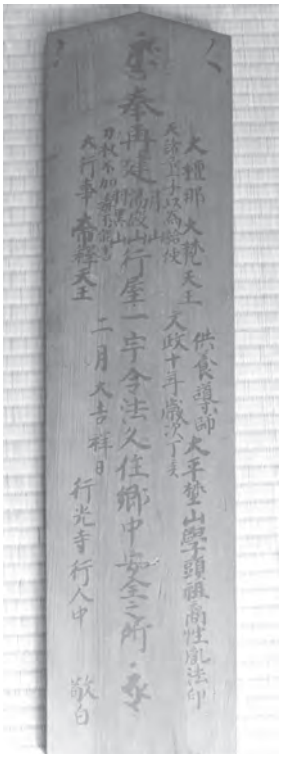
られている（37頁参照）。

また西青柳では、『御梵天由来』に続けて『御山えんぎ』『湯殿山御祝詞』『諸神祝詞』『般若心経』が唱えられ、『湯殿山御祝詞』は次のように始まる。

南無帰命頂礼懺悔懺悔六根罪消
御注連八大金剛童子
梵天帝釈両部大日
三宝荒神
御前十万八千仏
…

出羽三山信仰において梵天と帝釈天が重要な位置にあったことは間違いないようである。長南町蔵持の上地区行堂には文政10年（1827）に行堂を再建したときの棟札が残っているが、最上段右側に「大檀那大梵天王」、左側に「大行事帝釈天王」とあり、このことを裏付ける。

限られた資料からではあるが、房総の三山信仰において天部の神々、なかでも梵天・帝釈天が大きな位置をしめていたことから鑑みても、前節で言及した柳田国男の、大型の御幣である「梵天」と「梵天・帝釈天」が無関係だとする考えには、やはり疑問を抱かざるをえない。かといって、なぜ御幣に「梵天」の名をあてたのか、手掛かりとなる資料を見出すこともできない。梵天は特定の神仏を象徴してはおらず、どんな神仏の依り代にもなりうるようであるし、また今日の講行事で見られるように行人の身代り、魂の受け皿ともなる。今後、飯田家資料をはじめ房総各地に遺された資料を丹念に読み込み、湯殿行に関わる山形の現地資料と比較することによって、房総に伝えられた当初の信仰がどのようなものであり、梵天にどのような意味が与えられていたのか、どのような変化を経て今日に伝えられたか、理解を進めることができるだろう。今後の課題としたい。



長南町蔵持上行堂の棟札

梵天を収集した地域

さて、出羽三山信仰に関わる県内最古の石造物は市原市青柳台の供養塚にある寛永７年（1630）のものとされている。寛永７年は羽黒山中興の祖と呼ばれた宥誉（のちの天宥）が羽黒山の別当となった年に当たるが、時を同じくして関東地方への布教活動がはじまったのだろうか。その後寛文年間（1661～73）には関東における檀那場が設定されたと考えられており（菅根, 2011）、石造物でも市原市今津朝山に寛文２年、同市飯沼に寛文３年、佐倉市下志津と四街道市栗山に寛文４年のものなどが確認されている。これらの地域では350年もの間、この信仰を伝承してきたことになる。菅根は西蔵坊の「関東檀那場祈祷帳」を分析し、三山登拝開始の時期は地域によって異なり、定着の仕方も同様ではなく、また時期によって活況と衰退の波があったこと、そして江戸期に村の民俗として定着した出羽三山信仰は、明治政府の神道国教化政策によって三山そのものが神道となった後も、大きく形態を変えることなく継続したことを論じている。確かに、現在でも神仏が混交した信仰の有り方を各地で見ることができる。神道化が強力にすすめられた本山よりも、却って房総各地の講行事のなかに神仏混交時代の修験道の痕跡を拾うことが可能かもしれない。梵天の形態や使われ方も、古い時代からそのままにひきつがれている部分が少なからずあるだろうと思われる。

今回梵天を収集した33地区については、県内から広く情報を集め、なるべく偏りのない収集となるよう心がけたつもりであるが、千葉県全域から平均的な収集がされていないのは、出羽三山信仰の分布が県内均一ではないことによる。特に千葉県は日蓮宗寺院が多く、「上総七里法華」といわれる千葉市

緑区から東金市・九十九里町・大網白里町・茂原市北部にかけての地域をはじめ、日蓮宗寺院の檀家となるところに三山信仰は普及しなかったといわれている（菅根, 1999；立野, 2008）。また、安房地域では明治期に入ると急速に衰退したことが知られている（對馬, 1975；1982）。三山信仰が盛んな地域においても、その普及の時期は一様ではない。たとえば西蔵坊の檀那場では、17世紀後半の早い段階で登拝がはじまり信仰が定着した地域は、船橋市北部から八千代市と市原市から木更津市にかけての村々だとのことであり（菅根, 2011）、また大進坊の檀那場は、17世紀後半から18世紀前半では佐原市・いすみ市・鴨川市・館山市が中心であり、19世紀になって茂原市・長南町・長柄町が加わったという（菅根, 1999）。養清坊、長円坊の檀那場祈祷帳の分析も行われている（立野, 2008）。しかし宿坊の盛衰にともなって宿坊間で檀那場の取引が行われたこともあり、すべての地域の動静を把握するのは困難である。

また、戦中・戦後、そして近年の講行事の変容や衰退という問題もある。白井市・印西市には現在も宿坊の檀那場廻りを受け、三山登拝を行っている地域があるが、講行事で梵天を作ることは、近年行われなくなったと聞く。旭市内の講においても、三山参拝は現在も熱心に行われているが、梵天作成の機会はかなり前に失われ、今ではかつて梵天というものがあったということすら忘れられているようである。また反対に印旛郡栄町矢口では、出羽三山信仰の伝承を伝えていないにも関わらず、年１回、11月７日の「デーニチサママツリ」に梵天を作成して大日如来像に立てるという興味深い行事を伝承している（植野, 1993）。2011年にも行事が存続していることを確認したが、三山信仰との関わりが失われてしまっている行事の梵天は、今回の収集対象に含まなかった。

今回収集の34例から梵天製作の機会や形態などを見ると、四街道市・八千代市・佐倉市などの北総地域、市原市を中心とし長柄町・長南町へ続く内房北部地域、袖ケ浦市や木更津市の内房南部地区、また睦沢町・長生村・一宮町の外房地域のおよそ４つの地域に分けて類型的に捉えることができる。北総地域は一生に一度、死支度として三山へ行くという意識が強い。登拝後、同行者で記念碑を建て、一緒に山へ行ったメンバーのつながりはその後も長く続く。佐倉市上志津・同市木野子・千葉市南柏井では、梵天を立てる行事を行人全員が属する講ではなく、同行者のメンバーで行っている。梵天は５本・７本などを祭壇のように組む。また、北総地域でも西部の八千代市などでは、天道念仏がメインイベントとして継続されていることに特色がある。次に内房北部地域では、毎年のように登拝が計画されているところが多く、熱心な人は何度でも三山へ行く。講の集まりも世代ごとに分かれてはおらず、行人全員が参加できる集まりが、毎月持たれているところも多い。また非常に立派な供養塚が築かれており、初めて山へ登る「新行（しんぎょう）」が腰梵天を受けてくる習慣があって、登山を重ねて腰梵天を持つ人が多くなると供養塚に新たな記念碑を建て、碑の元に腰梵天を埋納する。行人の生前供養としての意義があるという。かつては万灯や山車を引き廻し、近隣のつきあい村からも万灯を出したり梵天を奉納したり、参拝者には酒を飲み放題で振る舞う盛大な祭りが行われ、梵天供養といった。一方、内房南部地域でも毎年のように登拝が計画され、八日講も頻繁に行われているが、南部では梵天供養が行われたという話は聞かれなくなり、記念碑の数も少ない。ただし概して内房では北部、南部ともに梵天が複雑で華やかな形となっており、３本を１組として立てる場合が多く、特に北部の梵天供養地域には梵天は行人を象ったものとするところが多く、実際、梵天の形にも反映されている。翻って外房地域に目を転じると、毎年のように登拝が計画され八日講も頻繁だが、記念碑の建立には熱心でないという点では内房南部地域と同様の傾向が見られる。年末の暮行をメインイベントとして、餅つきなどを盛大に行うことに特色がある。また梵天も12月に作られることが多く、形が比較的シンプルである。

34例を上記の４つの類型に分けると、北総型に№１（八千代市吉橋）～８（千葉市南柏井）、内房北部型に№９（千葉市大森町）～20（袖ケ浦市川原井）と№26（長柄町刑部）～28（長南町芝原）、内房南部型に№21（袖ケ浦市横田成蔵）～25（富津市小久保）、外房型に№29（茂原市野牛）～33（大多喜町小土呂）を充てることができよう。№26（長柄町刑部）～28（長南町芝原）については、梵天の形や行事のあり方が個性的であり、梵天の垂れ紙に型紙を用いず比較的シンプルな形であることは、外房の梵天に通じる。地理的にも外房に含めたほうが良いかもしれないが、かつての梵天供養や記念碑建立の有り方から、内房北部型に含めてみた。

このような地域による信仰形態の相違についても、本稿では分析を進める準備はないため今後の課題としたいと考えるが、県内の三山講の地域分布差を、西国・坂東・秩父百番の札所巡拝信仰との重層性のあり方から考察した岡倉捷郎の論考は示唆に富

んでいる。岡倉が述べるように、地域社会全体における信仰の重層性や競合関係、変化の過程などを包括し、県単位をこえた信仰圏や伝播経路を見ていくことが必要なのであろう。（岡倉, 1985a）梵天供養は集落による差異が少なく、他の習俗より起源が新しいためではないかとの指摘（立野, 1981）も重要に思う。伝播と受容の際に生じた相違と、伝承過程での変化の双方を視野に入れなければならないだろう。

それにしても、同じ梵天が２つとないことには驚かされる。「三山信仰はむやみに触れてはいけない聖なるもので、たとえ隣の地域で知り合いが行っていたとしても、その行を見に行くことは厳に慎まれるものだった」（市原市北青柳）との姿勢が、現在の多様性につながったのだろうか。

梵天が作成される機会と天道念仏

今回紹介した34例から梵天が用いられる場面を整理すると、(1) 奥州参り (2) 行（ぎょう）(3) 葬式 (4) 梵天供養の４つに分けることができるだろう。大枠は立野が「出羽三山信仰におけるボンデンの諸相」で立てた章立てと同じになる。ただし立野は木更津市中島の梵天立てや天道念仏を「この他の個性的な民俗行事」として考えたようだが、私は梵天立ても天道念仏も (2) の行に含めたい。また立野は梵天供養では供養塚に納められる腰梵天にのみ着目しているが、今回の収集と調査において私は、大型の御幣としての梵天だけを対象とし腰梵天は含めなかった。それでもやはり、梵天が立てられるひとつの機会として、梵天供養をあげなければならない。

特にここで記しておきたいのは (2) の行と天道念仏についてである。行とは出羽三山行人の「修行」的な意味をもつ名称で、本来は特別な機会に期間を設けて行われたものだったであろうが、現状では、講の年間行事として拝礼と親睦の機会になっている。またかならずしも「行」と呼ばない地域も多いが、同様な拝礼と親睦の機会をひとつのものとして捉えると、木更津市中島の梵天立ても天道念仏もすべてこのバリエーションのひとつと考えられる。

天道念仏は県内では東葛や千葉地域、より広域的には福島・茨城・栃木・埼玉県に広がる地域で行われてきたもので、主に春のはじめに梵天を立てて天候の順調なめぐりを祈る、三山信仰と農耕儀礼が習合した行事として注目されてきた。今回の梵天提供地区のうち天道念仏で梵天を作成している、またかつてしていたと聞くのは、八千代市吉橋（花輪区）、同市勝田、千葉市南柏井、同市大森町、市原市西廣の５カ所である。八千代市勝田では、現在は行人が集まり梵天を作るのは、年一回、３月の天道念仏だけとなっており、かつては念仏講のおばあさんたちも一緒だったというが、念仏講が途絶えた後は、三山登拝を経験した行人だけの行事として継承されている。ただし勝田では、以前は八日講（出羽三山講）の集まりが毎月あり、三山登拝前にも梵天を作って行を行っており、そのような行人の行事のひとつとして天道念仏があったようである。同市吉橋花輪や千葉市南柏井でも同様の在り方だったことが確認できる。市原市西廣では２月の冬行、６月の夏行に加えて３月15日に天道念仏を行っていたとのことであり、ここでも天道念仏は行人の行事のひとつと考えられている。

概して市原以南では、現在も毎月講の集まりを持って三山拝詞などを唱えているところが多く、現在は行っていなくてもかつては毎月行っていたという伝承を数多く聞く。そのうち梵天を作るのは、内房では正五九（ショウゴクウ）の月（１・５・９月）か冬と夏、あるいは春と秋の年２回という例が多い。正五九は一般に神詣りの月として知られているが、講行事の日程として取り入れられたのは神道化の影響によるのだろうか。袖ケ浦市川原井でかつて１月15日に寒行、８月24日に土用行が行われていたように、また四街道市内黒田では現在も３月８日に春行、９月８日に秋行が行われているように、冬と夏あるいは春と秋の「行」という形態がより古態を示しているように思われる。実際には市原市不入斗で６月に「虫梵天」、10月に「お礼梵天」が、市原市青柳で２・９月に「辻梵天」、５月に「浜行」が行われているように、地区によって変化に富む。不入斗ではかつては５月と８月だったという記録もある。

市原市西青柳の「辻梵天」では、梵天を集落の入り口の６カ所の辻に立てるが、これは四街道市内黒田で３月の春行と９月の秋行に村に入る道の入り口や水路の脇に梵天を立てることと共通している。千葉市南柏井や同市大森町では天道念仏において集落の境や川に梵天を立てており、また、長柄町刑部では２月の「辻切り」で３本の梵天を立て、市原市飯沼では正五九の月に供養塚へ３本立てるとともに集落境３カ所に辻梵天を立てる。各地で行と天道念仏、辻切り（辻梵天）が様々に習合している様相を見ることができる。

このように梵天を立てる行事を並列して比較すると、正月七草の早朝、若者が冬の海に梵天を立てることで知られる木更津市中島の「梵天立て」を、岡倉や地引が、冬行の特殊に変化した形だと考えたよ

うに（岡倉, 1981；地引, 2011）、天道念仏も行のひとつの形として捉えられてくる。ただし鈴木正崇は天道念仏が、出羽三山信仰の一形態であるだけでなく、その背景に彼岸やめぐりの民俗、あるいは時宗の踊り念仏、伊勢・熊野信仰などが複雑に習合していることを指摘しており（小西・鈴木ほか, 1990）、留意したい。

一方で長南町、茂原市、睦沢町、大多喜町の外房地域で12月に梵天が作られ、形も御幣を基本としたシンプルなものとなっているのは、冬行の変化というよりも、暮れに一年の無事を感謝し新たな年の平安を祈る、また別の心意からくるものだと感じられる。もっとも長南町蔵持で12月の行事を「霜月行」と呼び、同町芝原では梵天の作成はないが11月に行堂のおまつりを行っていることなど、外房地域の12月の梵天行事が本来は11月の行事であった可能性もある。

三山講と念仏講の合同行事が天道念仏だけに見られるものではないことも付記しておきたい。四街道市内黒田では春と秋の行に念仏講を招いているが、ここの行には、八千代市や千葉市域の天道念仏と共通する要素が多い。一方で睦沢町寺崎では８月の風祭行事を、大多喜町小土呂では春と秋の彼岸行事を念仏講と合同で行っている。千葉県北部から茨城県南部にかけてかつて行われた「時念仏」は湯殿山修験者によって普及されたといわれ（中上, 1993）、三山講と念仏講との関連も興味深いテーマになりそうである。

梵天の色と形、そしてその変化

房総各地で現在作られている梵天には、本来持っていたであろう修験道的な意味の痕跡を認めることができ、また伝承過程で付加された民俗的な意味づけも見ることができる。このことに着目して、対馬郁夫、立野晃がすでに論稿を発表していることは先に紹介した通りであり、また梵天の解釈には湯殿行の理解が不可欠であろうことも前述のとおりだが、今回、筆者が気づいたことを何点か付記しておく。

梵天には、垂れ紙を白い紙だけで作るものと、赤・黄・緑・青などの色紙を用いるものがある。白い梵天しか作らない地域もあるが、両者を作り分けているところでは、それぞれ「白梵天」「色梵天」と呼ぶことが多い。作り分けはさまざまで、３本を１組として作る際に中央の「親梵天」だけに色紙を入れてほかと作り分けている例が、市原市飯沼、同市上高根、木更津市有吉、一宮町中ノ原に見られる。また登拝前に立てる梵天で、新行は白、２回目以上は色（赤）とするのは、市原市上高根、長生村金田である。葬式とほかの行事で作り分けている例もある。四街道市内黒田、市原市朝生原では葬式にだけ色梵天を作り、逆に市原市不入斗、千葉市南柏井では葬式だけが白梵天だという。

また白梵天の使い方として特徴的なのは、たとえば八千代市吉橋花輪区や同市勝田の天道念仏で、５本の色梵天の棚から１本だけ離して立てる梵天が白であるような形である。千葉市南柏井でも棚を作る５本の色梵天のほかに１本の白梵天を作り、これは最後に川へ立てる。佐倉市上志津でも水神様に立てられる梵天だけが白であり、１本の白梵天に特別の意味がこめられているようである。飯田家資料『行人次第記』に「河梵天事　一本ハ秘曲也　遅梵天モ同事」とあり、「遅梵天」は「送り梵天」かと思うが、１本立てる特別な梵天であるところに、つながるものがありそうである。

梵天の作り分けをしないまでも、多くの地区で水神様や水辺が梵天を立てる重要な場所になっている。修験道では火と水が重要なことはもちろんだが、房総の梵天は水と強く結びついているようだ。湯殿山は「常火の根元」とされているが、また、こんこんと湯が湧き出る岩をご神体とし、参拝の前にはヒトガタを水に流して穢れをはらい、また冷水がしたたり落ちる岩に死者の戒名を書いた紙を貼る「岩供養」の場でもあるなど、水を信仰の対象としており、そこから生まれた習俗だろうか。それぞれの地区では「農業に水が大切だから」「禊ぎのため」「死者の穢れを流して成仏させるため」などと説明されている。

また湯殿山の参道に並ぶ梵天は、現在はすべて白であるが、『三山雅集』（1710年）には「五色の幣帛幾代幾年にか奉納し積置けん谷を埋み嶺に覆へり」とあることから、当時は五色の梵天が奉納されていたようである。修験の五智、五仏、五行は白黒青赤黄の五色で表現されるという（戸川, 1973；對馬, 1990）。修験道の神道化が梵天の色に影響を与え、五色から白紙への変化がもたらされた可能性は考えられよう。

梵天の藁ヅトには、垂れ紙だけでなく三角の紙、竹串、切れ込みを入れた細い紙を巻いて花のようにしたものなどが挿しこまれるが、これらが持つ意味も興味深い。特に花のようなものは場所によって「松葉」「花」「ハガチ（ムカデの意）」などと呼ばれるが、伝統的な葬具として作られてきたシカバナと同様のものである。また三角の紙は三山の印とされることが多いが、かならずしも３枚ではなく、１・５・６・８・

９枚の例がある。木更津市有吉ではこれを鎌だといい、何もつけない竹串を鍬としている。長生村金田のように三角が１つの梵天は他に例がないが、梵天は山へ行く人の身代りであり、また山へ行くと人は一度死んで、新たな命をいただいて蘇ってくるのだという説明を考えあわせると、三角は死者の印かとも連想される。一方で不入斗では藁ヅトの頭に三角を３本立てるが、梵天の元には八角の紙を２枚重ねて８本の三角を挿し、これは大日如来の座す八葉（はちよう）だろうとの指摘をいただいた（林慈空氏ご教示）。確かに飯田家文書の梵天の図にはみな八葉が描かれている。また八千代市勝田で黒く塗った割竹を「カラス」といい、長柄町刑部では幣束を「太陽」、割竹を「月」というのは、太陽の使いをカラス、月の使いをウサギとする三山修験の影響によるものだろうが、地元では、理由はわからないと言うばかりである。このように梵天の細部の形象にも、いろいろな解釈の可能性を見出すことができるが、確証を得られるような証言や資料は得られず、ただバリエーションの多さに驚き、楽しむばかりであった。

また意外に梵天の形というのは容易に変化するものでもあるらしく、近年の調査報告書の記述と現在とで異なっている例が多くある。管見の範囲で記しておいた。

まとめにかえて

梵天の作成を見学しながら、また直会（なおらい）の席でご一緒しながら、多くの方々から三山信仰への思いを伺った。「三山は五穀豊穣をもたらす神様。また先祖の供養のため、先祖の足跡を踏みながら行くところ」（各地）、「三山に行くのは男の死支度といわれていて、死を視野に入れて今後の行き方を考える年齢になったという意味がある」（佐倉市上志津）、「講は半分信仰で半分親睦。女房のいないところで酒が飲める場所で、神仏を考えるのは時々。ただ、村の重鎮の集まりでもあって、ここで重要なことが決まったりする。ちゃんとした家の世帯主しか入れない、和を乱すような人は入れない暗黙のルールがある」（長南町蔵持）、「初めて山へ行って、生まれ変わりということを実感しました。清々しい気持ちでしたね。行って良かったです」（市原市上高根）、「何回も三山に行って、最近わかってきたのは、三山の行は利他の行だということ。自分が救われるためとかではなく、人の幸せを祈る、広くいえば国土安穏を祈る行なのかなと」（長南町芝原）、「大日様にはお願いごとをしても良いが、御先祖様にはしてはいけない。御先祖様には、ただ感謝」（市原市今津朝山）、等々。同年代の方々が集い、祭壇に祝詞をあげた後、酒を飲みかわし、食事をする場に流れる和やかな時間。そこで時折投げかけられた真摯で求道的な語りに、幾度となく身が引き締まる思いがした。

千葉県ではなぜ出羽三山信仰が盛んなのかと、たびたび話題になる。登拝をすませて一人前とする意識が地域共同体に根付いていること、先祖供養や葬送儀礼と深く結びついていること、宿坊との長年にわたる強固な結びつきがあり、冬季の檀那場廻りを受け入れるおおらかな地域的な特性があること、出羽三山登拝そのものが持つ魅力、そして地域の方々が一緒に山へ登ることで生まれる連帯感と、それが次の登拝につながるベースとなっていること、また歴史的には近世、関東が出羽三山の山伏たちにとって信仰の開拓地で熱心な布教が行われたことなど、要因はいくつもあげていくことができるが、では、なぜそれが出羽三山でなくてはならなかったのかと改めて問われた時、説得力のある説明は難しい。様々な要素が重なり合っての偶然なのかもしれない。

ただ私が今回改めて実感として感じたのは、聖俗併せ持つ場としての三山講の存在意義である。地域共同体が生業・生活の場そのものであった時代には、このような講を通じた人間関係が、すなわち日々の生活の基盤そのものであったことは、言うまでもないだろう。しかし現代に至っても、地域の同年代の人たちが精神的な支柱となるものを共有しつつ心安らげる親睦の場があるということは、言葉に尽くせない安心感につながっているのではないだろうか。まして身上を次世代に譲り、先行きの不安を少なからず考えざるを得ない世代であれば、なおさらだろう。それがなぜ出羽三山講だったのかと問われれば、またまた堂々巡りにならざるを得ないが、今回の梵天収集にあたって各地の講の方々に接し、この講が人々の求めに応える力を、現在も持ち続けていることに感慨を覚えることが少なくなかった。

しかしまた、この信仰が衰退の途にあることも確かであり、今の世代で最後との声も多く聞く。生活や意識の変化は地域共同体の人々のつながりに影響を与えており、存続が難しくなっている伝統的な講組織は、何も出羽三山講に限らない。しかし、失った後で改めてその価値に気づいたとしても、取り戻すのは難しい。現代にあった有り方を工夫しながら存続させていく方向性を見出していただきたいものと願っている。

末筆となりますが、突然の不躾な依頼にこころよくご協力をいただき、梵天を作成してくださった各

地区の皆様に、あらためて心から御礼申し上げます。またこのような調査の機会を与えていただいたことにつきまして、「出羽三山と山伏」展の展示チームメンバー、特に多くの情報をいただいた島立理子氏・地引尚幸氏に感謝申し上げます。

引用・参考文献

東水『三山雅集』 1710年
石毛才一郎「倉橋の伝承行事について」『海上町史研究』 5　1977年
石毛才一郎「倉橋部落に伝承せらるる行屋体験記」『海上町史研究』 1979年
岩鼻通明『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院　2003年
植野英夫「史料紹介 千葉県栄町所在の時念仏塔－近世初期の念仏伝播の実相－」『茨城の歴史教育』16　1993年
大室晃「出羽三山行人行事覚書き」『市原の年中行事』市原市教育委員会　1965年
岡倉捷郎「関東における出羽三山信仰－その分布と三山講の性格・諸相－」『まつり』38　1981年
岡倉捷郎「房総における社寺霊山巡拝塔－出羽三山・百番札所信仰の重層に則して－」『房総の石仏』 3　1985年a
岡倉捷郎「三山参りと札所巡礼－“百”のとりもつ因縁譚－」『あしなか』191　1985年b
押尾忠『四街道市の民俗散歩－昔の内黒田村－』四街道市内黒田民俗愛好会　1981年
小西正捷・鈴木正崇ほか『船橋の天道念仏－第３次船橋市民俗芸能調査報告－』船橋市教育委員会　1990年
地引尚幸「木更津市中島の出羽三山信仰」『映像記録 房総の出羽三山信仰 解説書』2011年
菅根幸裕「出羽三山講」『千葉県の歴史 別編民俗１（総論）』千葉県　1999年
菅根幸裕「千葉県における出羽三山信仰の歴史的変遷－西蔵坊檀那帳にみる上高根村と中島村－」『映像記録 房総の出羽三山信仰 解説書』2011年
鈴木正崇「冬の峰のコスモロジー」『千年の修験 羽黒山伏の世界』新宿書房　2005年
立野晃「出羽三山信仰におけるボンデンの諸相」『歴史科学と教育』準備号　1981年
立野晃「上高根の出羽三山信仰」『南総郷土文化研究会誌』14　1983年
立野晃「市原市北部の富士講の民俗」『房総地域史の諸問題』国書刊行会　1991年
立野晃「出羽三山講と行人」『千葉県の歴史 通史編近世２』千葉県　2008年
對馬郁夫「安房の出羽三山信仰に関する考察」『館山市文化財保護協会会報』 7　1975年
對馬郁夫「安房地方の出羽三山信仰」『館山市文化財保護協会会報』15　1982年
對馬郁夫「市原市の出羽三山信仰に関する研究」『市原地方史研究』15　1988年
對馬郁夫「出羽三山信仰にまつわる梵天の諸相」『千葉県立上総博物館研究員紀要』 4　1990年
對馬郁夫『房総に息づく出羽三山信仰の諸相』2011年
戸川安章『修験道と民俗』岩崎美術社　1972年
戸川安章『出羽三山修験道の研究』佼成出版社　1973年
戸川安章校注『神道体系神社編32　出羽三山』神道体系編纂会　1982年
中上敬一「千葉県の時念仏信仰」『房総の石仏』 9　1993年
服部重蔵「海上町の出羽三山信仰」『海上町史研究』14　1980年
宮本袈裟雄「関東の出羽三山講」『日光山と関東の修験道』名著出版　1979年
柳田國男『大柱直』1915年（『定本柳田國男集第11巻』所収　筑摩書房　1969年）
柳田國男『日本の祭』1942年（『定本柳田國男集第10巻』所収　筑摩書房　1969年）
出羽三山歴史博物館『神々を招き祀る梵天展「奥州参り－死と再生の旅－」』 2009年
袖ケ浦町民俗文化財調査会『平岡地区の民俗』袖ケ浦町教育委員会　1991年
八千代市立郷土博物館『「八千代と出羽三山－奥州参り－」解説書』 2008年
八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 民俗編』八千代市　1993年
八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 通史編下』八千代市　2008年
千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 通史編近世２』千葉県　2008年
千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 別編民俗１（総論）』千葉県　1999年
「房総の出羽三山信仰」映像記録作成委員会『映像記録 房総の出羽三山信仰 解説書』千葉県伝統文化再興事業実行委員会（事務局：千葉県立中央博物館）2011年
※後続の個別報告で引用した文献も含む。

個別報告

以下は33地区34例の、梵天から見た出羽三山信仰の現状報告である。

行事の内容は主に地区の方々のお話によってまとめた。なお、千葉の県立博物館デジタルミュージアムにも「梵天にみる房総の出羽三山信仰」（http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/bonten/bonten-index.html）として33地区の梵天と行事について紹介している。

［作図：尾崎煙男氏］

■吉橋花輪（よしはしはなわ）区［八千代市］

梵天の作り方

藁ヅトの切り口を下に半紙を巻き、上・中・下３カ所をタコ糸で縛る。シデ（垂れ紙）は赤・黄・緑・青の色紙と白の半紙をたて半分、横３分の１の６枚に切り、切れ込みを入れて作る。色梵天は５色のシデ１枚ずつ、５枚を１組に上をひねっておき、上段に３組、中段に２組の計５組をタコ糸に挟み込む。藁ヅトの頭の中心には、５本にそれぞれ５色のうち１色の幣束を挿し、そのまわりの少し下がった場所には、三角を１色ずつ計５本挿す。白梵天は半紙で白一色に作る。色紙は特殊なものを島田台（八千代市）の商店から購入。白紙には本来は丈夫な和紙を使ったものだが、手に入らなくなり半紙で代用している。支柱にはシノダケを用いる。

現在の行事と梵天

３月15日ころの日曜日に、花輪公会堂（来福院の跡地）で「テントウマツリ（天道念仏）」を行っている。豊作や無病息災を祈る行事で、もとは奥州講が主体だったが、現在は地域の行事として、区長が中心になって実施している。公会堂の外に５本の色梵天をシノダケで結った祭壇を作り、白梵天１本を少し離れた場所に立てて、祭壇右奥の梵天と紐で結ぶ。梵天をつなぐシノダケと紐には五色のシデ（垂れ紙）をたくさん下げる。台座に寛政８年（1796）の年号がある大日如来の石像を、境内の塚から祭壇に遷し、お神酒や三升餅を供える。大日如来をオテントウサマと呼んでいる。般若心経や光明真言などを唱え、礼拝する。昼食後、大数珠をまわして念仏を唱える。オテントウサマを塚の上の台座に戻し、梵天も塚に移す。祭壇を飾ったシデ（垂れ紙）は、地域の各家に配る。昔は餅を搗いて、食べたり配ったり、もっと賑やかだった。

三山登拝の近況と梵天

三山には10年に一度ほど、行こうという人がまとまると行き、神社の塚に記念の石を立てていたが、近年は20年くらい行っていない。もともとの宿坊は西蔵坊だったようだが、前回に行った時も、宿坊には泊まらず出羽三山神社の別館に宿泊し、記念碑も建てなかった。
また、もともと三山へ行く前に梵天を作るようなことはなかった。

行人の葬式と梵天

三山へ行った人（行人）が亡くなると、色梵天を４本（テントウマツリの棚の４隅に立てるもの）作った。墓地には、納骨前にお骨を安置する場所があり、そこに４本の梵天を立てて参列者が回った。

梵天や行事の変化

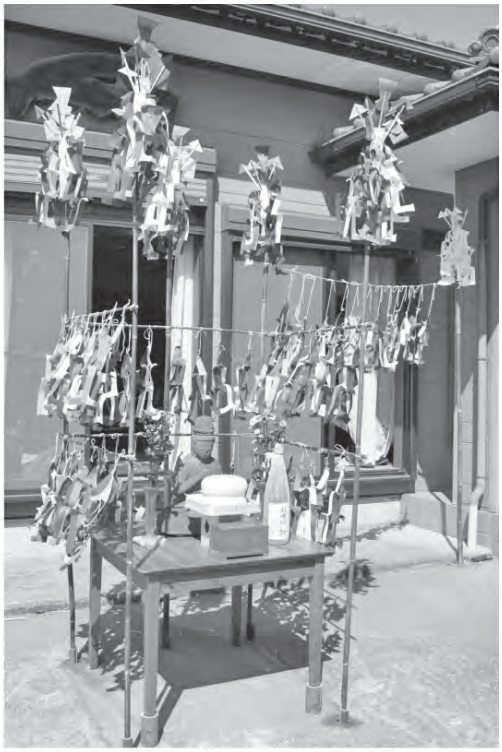
『八千代市の歴史　通史編下』（2008）によれば、藁ヅトの頭に幣束を挿した下には、竹の「カラサシ」３、「サンカク」３を挿すとあるので、その後、形の変化があったことがわかる。

藁ヅトを作る。

シデ（垂れ紙）を切る。

シノダケを結わえる。

般若心経や光明真言を唱える。



色梵天の頭の幣束は左前から赤黄白青緑。

オテントウサマを塚に戻し梵天を立てる。

■勝田（かつた）出羽三山講［八千代市］

梵天の作り方

マダケのまわりに藁を巻き、折り曲げて藁ヅトにする。切り口は下。半紙を巻き、白い三角３本、白の「松葉」３本、割り竹に墨を塗った「カラス」３本、幣束３本を挿す。色梵天の幣束は赤・黄・青・緑・紫など５色の色紙の異なる色を２枚重ね、半分に折り、切れ込みを入れて作る。色の組み合わせに決まりはなく、色々な色を入れてカラフルにするために重ねている。白梵天の幣束は白の半紙で作る。昔からの部材を組んで棚を作り、中心の穴に色梵天１本を挿す。４隅の柱には色梵天を１本ずつ縛り、割竹で結わえる。白梵天は本堂の外に立て、棚の中心の色梵天と紐で結ぶ。また小さな白い三角を戸数分用意しておく。

現在の行事と梵天

「天道念仏」は奥州参りをした講が３月14・15日に行っていた行事だが、今は第二日曜日に行っている。円福寺の本堂内に５本の色梵天を棚に組み、１本の白い梵天を本堂の外に立てて中央の色梵天と紐でつなぐ。棚に不動明王をおまつりし、お神酒や重ね餅を供え、講の男性が鉦と太鼓を叩き、三山拝詞などを唱えながら棚のまわりを廻る。昼食後、梵天を集落のはずれにある梵天塚へ持っていき、一番新しい記念碑の前に立てる。また家数分用意しておいた小さなサンカクを地面に立てる。行事の意味は伝わっていない。奥州参りに行った人たちの集まりは、今は年１回の天道念仏だけだが、かつてはもっと頻繁に集まっていたらしい。また平成６年までは念仏講のおばあさんたちも天道念仏に来て念仏を唱えたが、念仏講が解散した後は行っていない。

三山登拝の近況と梵天

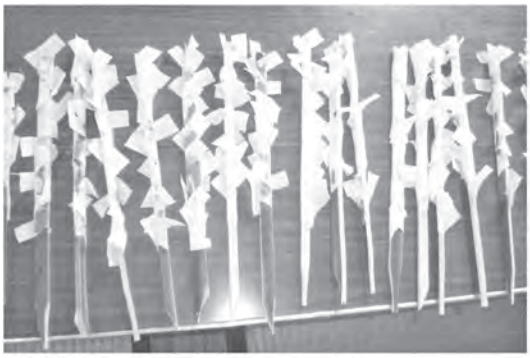
「奥州参り」には25年ほど前と30年ほど前に行っているが、その後は行っていない。宿坊は不明（『八千代市史』によれば長慶坊）。もともと山へ行くときだけのつながりで、宿坊からの来訪や、正月に札を送ってくるようなことはなかった。
また、三山へ行く前に梵天を作ることはなく、宿坊から腰梵天を受けてくることもなかった。下山後に梵天塚へ記念の石を立てる。

行人の葬式と梵天

奥州参りをした人が亡くなると、奥州参りの白装束を棺に入れるが、特別に何かを作ることはない。

梵天や行事の変化

宮本袈裟雄の記録（1979）には、三山登拝出立前に、行場にしめ縄を張り梵天を立てて行を行い、登拝中は毎朝家族が梵天に水を供えたこと、また登拝者は八日講を組織し、毎月八日に三山の掛け軸を懸けて飲食し、その宿は輪番で２軒ずつ務めたことなどが記されている。また『八千代市の歴史　資料編　民俗』（1993）によれば、ひととおりの葬儀の後、三山の同行が死者の隣の家に集まり、梵天を作って墓に立て、三山の祝詞をあげた、これをボンテンハギと言ったとある。これらはすべて、伝承としても聞くことができなかった。



「松葉」あるいは「ヒラヒラ」。（S）

「カラス」。（S）

5本の色梵天を棚に組む。（S）

本堂の外に白梵天を立てる。

三山拝詞などを唱えながら棚を廻る。（S）

梵天塚へ向かう。（S）

戸数分の三角を立てる。（S）

村境だった梵天塚も、今は前に団地が広がる。（S）

※（S）は渋谷さゆり氏撮影。

■上志津（かみしづ）八日講［佐倉市］

梵天の作り方

マダケを支柱とし、その周りに藁を巻きつけ、折り曲げて藁ヅトにする。藁ヅトの切り口は下。藁ヅトに半紙を巻き、上下２カ所を麻紐で縛る。垂れ紙は赤・黄・紫の３色の色紙をたて３分の１、横２分の１の６等分に切り、切れ込みを入れて３回折下げて作る。これを８枚、麻紐に挟みこんで下げる。藁ヅトの頭には３色の三角を各１枚、計３枚挿す。支柱中ほどには半紙を巻き、サカキの小枝を結ぶ。白梵天１本は色梵天よりひと回り大きく作り、三角も垂れ紙も白い半紙で作る。垂れ紙の枚数は色梵天同様８枚である。

現在の行事と梵天

三山に行くと八日講のメンバーになる。講には一緒に行った仲間の会ができており、現在、平成元年会、十年会、二十年会がある。一番新しく山へ行った仲間が、先代から行事を引き継いで行うことになっている。かつては月１回だったが、今は正五九（１・５・９月）の都合のよい日に西福寺で行っている。色梵天５本を、西福寺境内の梵天塚に立つ記念碑を囲むように立て、白い梵天１本を水神様に立てる。昔は湧水が流れる川のほとりだった。これを「川セガキ」とかと言ったというが、はっきりしない。

三山登拝の近況と梵天

「奥州参り」は男の死支度。宿坊であつらえる行衣、杖、菅笠を葬式の棺へ入れるので、一度は必ず行かなければいけないが、逆にいえば、ほとんどの人が一生に一度しか行かない。およそ10年に一度、そろそろという頃になると、村の先達（有力者）が適齢者に声をかけて人数をまとめるので、今まで続いてきたともいえる。かつては三山の帰りには佐渡へ渡るものとされ、三途の川を渡るような意味があった。畔田（佐倉市）では、佐渡への海上でこよりの袈裟を海に投げ入れたという。因みに女の死支度は秩父参りで、最後に長野の善光寺で紙の六文銭や足袋などが入った折鶴を求め、これを棺に入れる。宿坊は神林。来訪はないが、正月にお札などを送ってくる。
出発の朝に八幡様へお参りし、妙見様（石尊様とも呼ぶ。正式には天御中主神社）で安全祈願をする。先達が赤飯を炊いてくるが、三山登拝がかつて命がけの旅だったことの名残。出立前に梵天を立てたり、宿坊で腰梵天を受けてくることはない。登拝後およそ半年後に記念の石を立て、このときは梵天を作ってお祝いをする。

行人の葬式と梵天

かつては同行者が亡くなると墓のまわりに色梵天を４本立て、隣の家が赤飯を炊いて墓地で配った。葬儀を式場で行うようになり、このようなしきたりがなくなった。

梵天や行事の変化

かつては記念碑の前に立てた梵天を、その後村境や岐路に持って行った。道路の舗装で今のような形になったのではないかとのこと。また厄落としの意味でみかんや餅を投げたことがあったというが、今は行っていない。

死支度の白衣・笠・杖。

藁ヅトに半紙を巻く。

水神様に白い梵天を立てる。

梵天塚の登拝記念碑のまわりに５本の色梵天を立てる。

■木野子（きのこ）奥州講［佐倉市］

梵天の作り方

藁ヅトは切り口を下にし、マダケの支柱を挿す。半紙を巻き、麻紐で縛る。半紙をそのままの大きさで３枚重ねにして切れ込みを入れ、３回折下げた垂れ紙を、麻紐に挟むようにして３組下げる。大梵天には同じ３枚重ねの半紙で作った垂れ紙を４組下げる。どちらも上に三角の「かんざし」を５枚挿す。支柱の中ほどにサカキの小枝を結ぶ。

現在の行事と梵天

一緒に山へ行った仲間で別々に行事を行っている。昭和60年に登拝した人たちは７月20日前後の日曜に年１回集まる。それ以前に登拝した先輩たちは春と秋の彼岸の年２回集まっている。どちらも公民館に三山の掛け軸をかけ、梵天を作って供養塚に立て、その後直会を行っている。梵天は白いものを５本作る。供養塚の四方を小さな梵天で囲い、中心に大きな梵天を１本たて、それぞれを麻で結ぶ。唱えごとは伝わっておらず、二礼二拍手一礼のみ。
昭和60年の会では登拝後およそ10年後に、再度三山へお礼参りに行った。また２年に一度、親睦旅行を行っている。４人ずつ２年間、当番をつとめ、旅行が終わると次の当番に引き継いでいる。

三山登拝の近況と梵天

およそ10年に一度、同年代の人たちでまとまって三山に行く。一生に一度のことで、山へ行くと奥州講に入ったが、昭和60年に登拝した人は17人と多かったので独立し、その前に行った人たちとは別に行事を行っている。その後平成11年に行った人は会を作らず、先輩たちの講にも入っていない。宿坊はずっと林坊だったが、絶えてしまったため昭和60年から生田坊になった。
山へ行く前に梵天を立てることはなく、腰梵天を宿坊から受けてくることもないが、山へ行った翌年に記念の石を立てる。昭和61年の石立てには宿坊から拝みに来てくれた。

行人の葬式と梵天

奥州講の人が亡くなると、三山で判（御朱印）を押してもらった晒の布（本来は袢纏）を棺に入れ、また白い梵天を５本作ってイシラント（墓石）に立てた。当地区ではかつては埋め墓と参り墓が別々だった。昭和60年登拝の仲間のうち一人が亡くなったときに梵天を作ったが、これが最後になるのではないかとのこと。

行事の変化

昭和62年にノートに記した「梵天のつくり方」では、大梵天には５枚重ねの半紙で作った「かざり」（垂れ紙）を３組下げるとあり、今回の大梵天の垂れ紙とは、重ねた半紙の枚数も下げた組数も異なっている。またノートには、梵天の頭に三角の紙をはさんだ「かんざし」と何もはさまない「くし」を３本ずつつけると記されているが、今回作成された梵天には「かんざし」が５本で「くし」はなかった。枚数や本数には、あまりこだわらなくて良いようである。

「かんざし」。

垂れ紙を折る。

垂れ紙を麻紐に挟む。

大梵天の頭。

供養塚を４本の梵天で囲み、中心に１本の大きな梵天を立てる。

■内黒田（うちくろだ）出羽三山講［四街道市］

梵天の形

藁ヅトの切り口は下。藁ヅトは半紙で巻き、頭にも半紙をかぶせる。垂れ紙は半紙を墨書きの型にあわせて切って作る。大梵天では半紙を４等分にし、小さい梵天は８等分にする。先端を縒って麻紐に縛りつけ、その紐を藁ヅトの上方に巻きつける。大梵天は14枚くらい、小梵天は10枚くらいで、枚数に決まりはない。頭には幣束１本、サカキ、山の頂をずらして折った三角３本、先を黒く塗った割竹３本を挿す。マダケの支柱を挿し、中ほどに垂れ紙１、先を黒く塗った割竹１本、サカキを結ぶ。

現在の行事と梵天

毎年３月８日に「春行」、９月８日に「秋行」の年２回の行を西光院で行っている。基本的には１軒からひとり出ることになっており、地区で全50軒くらいあるが、今のメンバーは32名。平日なので、出席する人はさらにその半分くらい。大きな梵天を１本、少し小ぶりの梵天を６本作り、大きな梵天を中心にそれを囲むように小さな梵天を６本立て、７本で祭壇のようにして、その前方にしめ縄を張る。かつては念仏講を招いて「お山念仏」を拝んでもらい、そのあとに男たちで三山の拝みをしたが、数年前に念仏講がなくなったため、今は男たちだけの行事になっている。その後、大梵天を神社の梵天塚に、小さいものを５本、村に入ってくる各道路の、外から見て左側に立てる。厄病祓いの意味があり、厄病は左側から入ってくるといわれている。また川（用水路）に梵天１本としめ縄を張り、これは「川セガケ」などという。小さな梵天は、かつては８本だったが、団地ができて道が２本ふさがったので６本になった。春行と秋行はまったく同様に行う。

三山登拝の近況と梵天

「奥州参り」には20年に１度くらい、人数がまとまると行った。たいがい一生に一度で、直近では昭和61年、その前が43年なので、もう25年以上行っていない。奥州参りは男性の死支度で、女性の場合は秩父参り。三山へ行くと三山講に入り、「行」に参加する。宿坊は神林だが、山へ行くときだけのつきあいで、神林から内黒田に来ることはないし、正月にお札を送ってくることもない。
出発の前に熊野神社に集合して拝んだが梵天は作らなかった。腰梵天も受けてこないが、登拝後しばらくすると、一緒に行った人たちで梵天塚に記念の石を立てた。石は前回よりひとまわり大きく作るものだった。梵天塚は、現在は熊野神社にあるが、明治ころまでは大榎のある三叉路にあった。男性が三山に行くと、その半年くらい後に女性が秩父参りに行き、さらに２年くらいたつと男女一緒に「上総参り」に行った。

行人の葬式と梵天

行人が亡くなると色紙の梵天を作り、墓の周りに立てたとのことだが、『四街道市の民俗散歩－昔の内黒田村－』（1981）にも、かなり前に行われなくなり話にだけ聞いていることと記されており、詳細は不明である。

藁ヅトを作る。

垂れ紙を切る。台の裏に型が墨書きされている。

垂れ紙の先を縒って麻紐に縛っている。

7本の梵天で祭壇のようにし、前にしめ縄を張る。

村の入り口に立てる。

■栗山（くりやま）出羽三山講［四街道市］

梵天の作り方

枝葉のついたマダケを用いる。藁ヅトの切り口を下にし、幣束を頂点に１本、その周囲に３本、計４本挿す。１本の梵天を中心に、その周囲に４本の梵天を立てて縄を張り、結界の形にする。正面に注連縄を渡す。

現在の行事と梵天

１月と８月の最終日曜日に「行」を行っている。近年は８月だけに梵天を作っていたが、本来は１月にも作るものであり、昨年と今年は１月と８月に作った。記念碑の塚の前に５本の梵天で祭壇を作り、三山拝詞などを拝む。

記念碑と行人の墓がある場所を「行人塚」と呼んでおり、昭和51年、この一角に「栗山農村広場やすらぎの家」が建設された。それから行人の会合はここで行うようになったが、それ以前は蓮華寺で行っていた。

三山登拝の近況と梵天

「三山参り」には、かつては20年に一度くらいの割合で、人がまとまると行っていた。平成になって頻繁になり、７年、14年、20年、23年に行っている。７年は25名で、皆初めての登拝だった。14年は７年に参加した人のうち11名がお礼参りとして行った。20年は25名で、うち初めての人が13人。３回すべてに参加している人もある。今年23年には９人が行った。宿坊は神林。特に定期的に廻ってくることはなく、正月に札を送ってくることもない。

登拝の前には香取神社で祈願をした。梵天は作らない。腰梵天を受けてきたこともない。帰ってきた翌年に「カッサ（上総）参り」に１泊で行き、笠森寺、清澄寺、誕生寺、崖観音などを廻る。行人塚には寛文４年（1664）の出羽三山碑がある。近年も山へ行って来ると記念の石を立てるが、お礼参りでは建てない。

行人の葬式と梵天

むかしは行人の男性は行人塚に、秩父参りをした女性は蓮華寺に、またこどもは内野の墓地にと、家族でも３カ所の墓地に別々に埋葬されたが、火葬になってから、次第に家ごとに墓地をまとめるようになった。ただし昔から行人だからと特別な葬式の行い方はなかった。

藁ヅトを作る。

頭に１本、周囲に３本の幣束を挿す。

幣束の軸にはシノダケを用いる。

記念碑の塚の前に５本の梵天を立て、三語拝辞、三山拝詞などを唱える。

■下志津新田（しもしづしんでん）出羽三山講［四街道市］

梵天の作り方

白梵天３本、色梵天５本を作る。藁ヅトの切り口は下。半紙を巻き、色紙に切込みを入れて３回折りさげるようにした垂れ紙を、三段に、適当な枚数を糊でぐるりと貼りつける。白梵天は半紙を８分の１にして用いる。色梵天は、かつては半紙判の特別な色紙を用いていたが現在は入手が難しいため、文房具店などで購入できる普通の色紙を使っており、赤・黄・オレンジ・黄緑・空色など色とりどりである。頭に幣束１本を挿し、少し下がったところへ斜めに三角２本を挿す。これはすべて白い半紙で作る。マダケの支柱を挿し、中ほどに半紙を巻いてサカキを挿し、垂れ紙をつける。白３本の梵天は竹のヒネで１組に結わえ、梵天塚の中心奥まったところに立てる。色梵天は塚の周囲に４本を立て、さらに右奥に１本を立て、これを「離れ梵天」という。色梵天５本を紐で結んで結界を作る。

現在の行事と梵天

江戸時代後期に成立した新田村であり、明治期に全戸移転の歴史も持つ地域である。
八日講は、もとは毎月のように行っていたが、今は１・４・７・11月だけになり、１月は月末に、ほかは８日に行っている。４月は梵天行事を行い、金毘羅様の境内にある集会所で白３本、色５本の梵天を作り、梵天塚に立てて拝む。金毘羅様の前と、梵天塚までの途中に２つある角を曲がったところで二手に分かれ、「国津神」「天津神」という掛け合いを３回くりかえす。この行事は、行人の葬式のやり方を伝えているのではないかとのこと。宿坊から檀那廻りに来る年は、その日にあわせて行う。

三山登拝の近況と梵天

「奥州参り」には10年に一度くらい、人数がまとまると行く。最近は地区に墓地を持たない新しい家の人にも声をかけているので、山へ行っても正月のお札はいらないという人がいる。直近では昭和58年、平成７年、17年に行った。ほとんどが一生に一度だけの登拝で、経験者が先達となって連れていく。宿坊は神林。２年に１度、３月ころに来訪がある。暮れに正月のお札を送ってもらうのは44軒で、これが講員の人数になる。
三山へ行くときに梵天を作ったということはない。山へ行った翌年、墓地のはずれにある梵天塚に記念碑を立てる。宿坊で腰梵天を受けてくるが、行衣や宝冠などといっしょにしまっておくだけで、記念碑の下に埋めることはない。

行人の葬式と梵天

三山へ行った人は、死ぬとすぐ神になれると言い、葬式も特別だった。地域が２区に分かれており、その区の人たちで普通の葬式をしたあとに、別の区の山へ行った行人が白装束で４月の行事の梵天と同じものを作り、墓地に立てて拝んだ。「ボンテンハギ」という言い方はない。土葬から火葬になって梵天を作らなくなり、昭和56年が最後となった。

藁ヅトを作る。

垂れ紙を貼る。

垂れ紙とサカキをつける。

金比羅様を出る。

「国つ神」「天つ神」の掛け合いをする。

3本の白梵天を結わえ、塚の中心奥に立てる。

4本の色梵天で囲み、右奥に「離れ梵天」を立てる。

行人が梵天を作ったかつての葬式。（昭和7年）（K）

※（K）は講提供。

■南柏井（みなみかしわい）出羽三山講［千葉市］

梵天の作り方

藁ヅトの切り口を下にし、半紙を巻く。上に三角を３本挿す。色梵天の場合も三角は白。色梵天では赤・黄・緑・青・紫の５色の色紙を、１枚を半分切り、また４つ折りにして幣束の形に作り、25本挿す。白梵天では同じく半紙を半分にして作った幣束を25本挿し、加えて通常の幣束より足を長く、細長く下がるように作った垂れ紙を３本挿す。マダケの支柱を挿し、中ほどに小さな幣束とサカキを麻紐で縛りつける。５本の色梵天を木枠の中心と４隅に結わえて棚を作り、中心の梵天と四隅の梵天を紐で結ぶ。木枠の四辺にはあらかじめ48の穴があいており、シノダケに色紙の幣束をつけた小幣を挿すようになっているが、実際には地区の軒数分、33本だけを作って挿す。この小幣は、色紙を２色重ねて作り、また軸にするシノダケはハカマをすべて３㎝ほど残して縞々の段に作る。

現在の行事と梵天

３月中旬の土日に「天道念仏」を行う。本来は３月14日と15日に行う行事だった。かつては14日に子供たちが太鼓や鉦をたたいて村を回って賽銭をもらい、また念仏のおばあさんも集まったが、今は昭和58年に「奥州参り」をした人たちだけで行っている。14日に色紙の梵天を５本と小幣33本で棚を作り、大きな重ね餅を供える。また白の梵天１本を別に作り、これを14日の夕方、花見川の川岸に立てて拝み、また公民館に持って帰ってくる。夜はみなで酒を飲む。15日の夕方から梵天の棚に供えた重ね餅を切り、小幣といっしょに地区の33軒に配ってあるく。また５本の色梵天を、集落の入り口５カ所に立てる。白い梵天は再度花見川の岸に立て、この日は立てっぱなしにする。夜はまた公民館で酒を飲む。

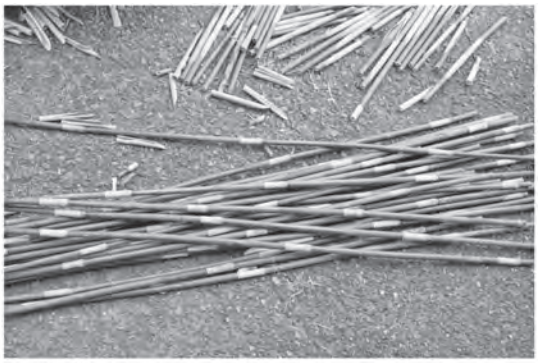
三山登拝の近況と梵天

「奥州参り」はある程度同年代の人たちで話がまとまると行ったもので、山へ行くと天道念仏の行事を先代から引き継いだ。現在は昭和58年に登拝した人たちで行事を行っているが、その後の世代が奥州参りをしていない。先輩の誰かが先達として声をかけないと話がまとまらない。行事で集まる公民館は、泉蔵寺の廃寺跡。宿坊は三光院だが、近年、つきあいがなくなっている。
また、登拝の前に梵天を立てるようなことはなく、三山へ行くとその年の秋、大杉様の境内に記念の石を立て、その翌年春には「房州参り」に行った。昭和58年の場合は、三山へ行った15名に前回の参加者から２名を加えた17名で、一泊の行程で鹿野山神野寺、安房神社、清澄山、小湊誕生寺、一宮玉前神社、笠森観音を参詣した。

行人の葬式と梵天

いっしょに山へ行った人が亡くなり、葬家から「ボンテンハギ」を頼まれると、葬式の翌日に梵天を作った。白い梵天５本で墓を囲み、小さな幣束も白でたくさん作って飾った。火葬になってから、「ボンテンハギ」は行わなくなった。

色梵天５本と小幣 33 本で棚を作る。



小幣の軸にするシノダケ。

小幣と餅を配る。（K）

色梵天を集落の入り口に立てる。（K）

白梵天を花見川の岸に立てる。

※（K）は木原律子氏撮影。

■大森町（おおもりちょう）出羽三山講［千葉市］

梵天の作り方

藁ヅトは切り口を下にし、半紙を巻く。赤・黄・緑・紫・ピンクの色紙を３分の１に切って切れ込みを入れ、垂れ紙にし、穴をあけておよそ20枚ずつ麻紐に通し、２段に結びつける。頭には幣束１本、山をずらした三角２本、サカキを挿す。マダケの支柱中ほどにつける小さな御幣をカギという。
梵天供養に招かれたときなどに作る正式な梵天は奉書紙で作った。白い梵天だった。

現在の行事と梵天

２月に「天道念仏」を行う。大森町は１組と２組に分かれており、かつては１組が２月15日、２組が３月15日に寺の太子堂で行っていたが、今は一緒に２月中旬の日曜日、神明神社境内の自治会館で行っている。「旧家」といわれる古くから続く30軒ほどの家だけで行っている行事で、16～７人が集まる。寺で行っていたころは、棚のようなものを作って境内に出し、子供たちがグルグル周ってお菓子をもらって帰るようなことをやっていた。現在は１年に２軒ずつ三山講の当番になり、大日如来の厨子と三山の掛け軸を持ち回りで管理している。色紙で作った梵天を、隣集落との境とマツズミ川あわせて４か所に立てる。魔よけの意味がある。色紙の垂れ紙は、梵天に飾る以上に多く作り、旧家に２枚ずつ配る。玄関の魔よけの飾りにする。また８月の盆の次の日曜には３本の色梵天を作り、供養塚に２本、マツズミ川に１本立てる。マツズミ川の梵天を立てる場所は、かつてはオチ（ため池）になって、フナやコイが集まる特別な場所だった。

三山登拝の近況と梵天

三山には、以前は身上を譲られるような歳になると誰もが行ったもので、毎年のように、女性もいっしょに行っていたが、最近10年くらいは行っていない。宿坊は神林で、毎年廻ってきて役員の家で迎えていたが、２年ほど前から断り、お札だけを送ってもらうつきあいになっている。
三山へ行く前に梵天を作るようなことはなく、はじめて山へ行った人がいただいてくる「剣梵天」がある程度たまると供養塚に納め、記念の石を立てた。これを「梵天供養」といい、最後に行ったのは昭和61年である。それまで村はずれにあった供養塚が京成千原線の工事にかかったため神社の境内に移し、その記念の供養を兼ねて行った。梵天供養の梵天は白が３本。輿に大日如来をのせ、まわりに剣梵天を立てる。これは生きている人のものは白い布で、この日を待たずに死んだ人のものは黒い布で包む。まわりの地域に声をかけずに行う「朝飯供養」だった。近隣の梵天供養に呼ばれると、白い梵天を１本作って持って行くものだった。

行人の葬式と梵天

行人が亡くなったときは色梵天を４本作り墓に立てたが、今は作っていない。

供養塚。盆に立てた梵天が１月まで残っていた。

垂れ紙を麻紐に通す。

頭に挿す幣束、三角と支柱につける「カギ」。

サカキを挿す。

「カギ」をつける。

大日様の厨子と三山の掛け軸を拝む。

マツズミ川に梵天を立てる。

■南生実町（みなみおゆみちょう）出羽三山講［千葉市］

梵天の作り方

藁ヅトの切り口を下にして半紙を巻く。半紙を半分に切り、それを２つ折りにし切れ込みを入れて作ったシデを右回りに糊で貼っていく。おおよそ１段に12枚、３段に貼る。藁ヅトの頭には幣束３本、三角３本を挿す。マダケの支柱をさし、中ほどに建前道具（日の丸扇と女性の道具（紅皿・鏡・針・櫛・おしろい・なかざし・かもじ)、男女の紙雛）を下げる。

現在の行事と梵天

年１回、８月のお盆過ぎ、今は第三日曜日に梵天行事を行っている。「一日行」または「行」という。山へ行かなかった人も含めて改めて「行」を行うという意味がある。梵天を１本、お塚（供養塚とも）に立てる。昔は村境や用水を引くところ、清水の湧くところなどにも４～５本立てた。何よりも五穀豊穣の祈願が大切で、農耕には水が大事だったからだろうが、今は祈願の内容が家内安全、交通安全になっている。お寺（広照寺）で梵天を作り、お塚に梵天を持っていって拝み、お寺に戻って直会をする。供養塚は、かつては村のはずれにあったが、おゆみ野の住宅地造成にかかって平成７年（1995）に移転した。そのときに「梵天供養（近隣の村も招く大供養)」を行った。

三山登拝の近況と梵天

三山へは毎年７月20日ころに行っていたが、八剣神社の祭礼（7/28）で神輿の渡御が復活してからは、神輿と神楽の奉納を一年おきとし、神輿を出さない年に三山へ行くことになった（東電の火力発電所が建設され御浜くだりができなくなってしばらく中断していたが、町内の渡御だけでもやろうと復活させた)。親から所帯を譲られるような年齢になると山へ行くことになっており、何回でも山へ行く人が多い。今も女人禁制である。講の役員は、火の親（代表）と会計がひとりずつ、世話人が各班１名で８名。10名の役員で２カ月おきにオツカの草刈りを行っている。宿坊は神林。毎年、２月ころに役員の家へ来るので、役員だけが集まっている。

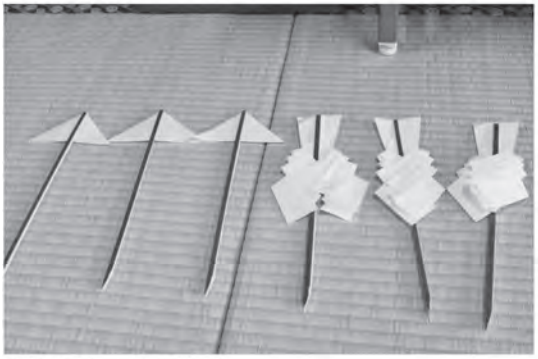
出発前に梵天は作らない。朝４時に集まると、神社でお祓いをしてもらい、オツカにお参りし、お神酒をまわして出発する。新行の人がもらってくる腰梵天がある程度たまると記念の石を立てる供養を行う。最近では平成22年に神社の境内に石を立てた。

行人の葬式と梵天

行人の葬式には、梵天を墓地にある小さな供養塚に１本立てる。シデの貼り方が左周りで、行の梵天とは反対。山３つを墨で黒く塗る。日の丸扇は行の梵天と同様につけ、逆さにはしない。

シデを切る。

シデを右回りに貼る。



頭に挿す三角と幣束。

扇や女性の道具は建前用にセットで販売されている。

完成した梵天。

供養塚。

■出羽三山八幡（やわた）敬愛講［市原市］

梵天の作り方

紙は奉書紙を使う。藁ヅトを作り、切り口を下にして紙を巻き、奉書紙を３枚重ねて作った垂れ紙を３組つける。３本の梵天の中心になる「親梵天」は両脇の「子梵天（こぼんてん）」より藁ヅトも垂れ紙もひと回り大きく作る。親梵天の垂れ紙は奉書紙を半分に切り、３枚重ねて２つ折りにし、型にあわせて切り、広げる。子梵天は奉書紙を４つに切り、同様に作る。垂れ紙の上から紐結びをする。人の顔を象っており、後ろ側には叶（かのう）・総角（あげまき）・あわじ結びをつなげた「袈裟」を下げる。頭にサカキ、三角１本、「花」２本を挿す。支柱はシノダケを用いる。竹が貴重な地域なので、シノダケは何度も使いまわす。支柱中ほどに火の親が作った三山のお札をつける。

現在の行事と梵天

「行屋」は飯香岡八幡宮の境内地の一隅、石尊様の隣にある。もともとは満徳寺の境内にあったが、昭和34年に現在地に移した。祭壇は３つに仕切られ、中央には「出羽大神　月山大神　湯殿山大神」の額を掲げ、神鏡や幣束を祀る。右壇には大日如来と不動明王を祀り、左壇は「祓殿」と「霊祀殿」とされて物故行人の位牌などを祀っている。

毎月８日に「八日講」を行っており、八日講では行屋の前に黄・赤・白・緑・青の五色の旗を立てる。正五九（１・５・９月）には３本組の梵天を作り、行屋入り口や供養碑などのしめ縄を替える。１月の日程は特別で、12月27日に３本の梵天を作り、餅を搗いて重ね餅を作る。元旦に梵天と重ね餅３組を三山供養塚に持っていく。この餅は４日におろして講員の家数に切り、１月８日の八日講の行事に先だって、お札や暦とあわせて各戸に配る。お札や暦は８日に間に合うようにと宿坊（正伝坊）から送られてくる。

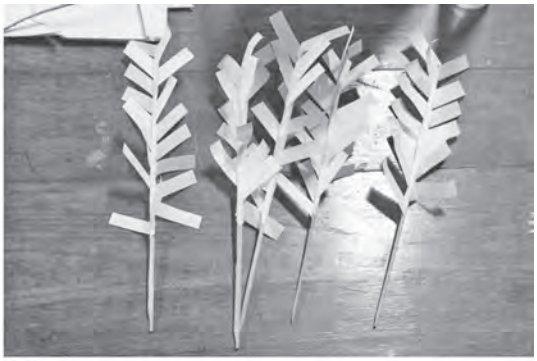
三山登拝の現状と梵天

八幡敬愛講はもともと観音町、濱本町、南町、新宿、本町の講だが、本町は人数が少なかったことなどから八日講に参加せず、三山登拝も別に行っている。宿坊は正伝坊。数年に一度、２月ごろに来訪がある。三山には毎年７月20日ころに参拝している。戦後は女性もいっしょに登拝しているが、八日講は男性だけの会である。三山参拝の前には、昔は海で身を清めたが、現在は「潮垢離」として神社で祈祷してもらう。参拝に行く人の人数分の梵天を作り、行屋の前に立てる。梵天は行く人の身代りで、帰ってくると、その日の夕方に、自分で自分の梵天を倒す。一度死んで生まれ変わるという意味がある。翌日の足洗いで供養塚に持っていき、まとめて立てておく。およそ一カ月そのままにしておき、９月８日に下げてお焚きあげをするが、竹だけは残して使いまわす。供養塚は市立八幡幼稚園となっている場所にあったが、行屋の移転と同じころに飯香岡八幡宮の境内に移した。

行人の葬式と梵天

行人が亡くなると、３本の梵天を作る。山へ行くときや正五九の梵天と形は同じだが、サカキをシキミに替える。墓地へ持って行って立てる。

型に合わせて切った垂れ紙。3枚で1組。


「花」。

紐結びは顔を象っている。

後ろに「袈裟」の紐結びをつける。

行屋前の五色の旗の間に立て、三山の札をつける。

支柱につける三山の札は、火の親が作る。

供養塚に梵天を持っていき、祈祷を行う。

■飯沼（いいぬま）行人講［市原市］

梵天の作り方

藁ヅトの切り口を上にしてマダケの支柱を挿す。藁ヅトに半紙を巻き、上からもかぶせて紐で縛る。垂れの紙は、１本の梵天について石州の半紙を10枚使う。１枚を半分に切って型にあわせて切り、２枚ずつ頭をひねっておき、紐に挟み込んで垂れ下げる。親梵天にだけ、さらに赤・黄・緑・青・紫の色紙をやはり半分に切って作った垂れ紙を各２枚、白い垂れ紙の上から挿しこむ。また梵天の頭に幣束１本、サカキ、「カンザシ」９本を挿す。「カンザシ」のうち３本は上部を黒く塗り、残り６本には小さな三角の紙をつける。親梵天の竹の支柱に半紙を巻くが、これを「ゴオ（牛玉）」と言う。親梵天と子梵天は供養塚に立てる際、竹を組んだ「カゴ」を結びつけ、３本１組にする。なお、葬式の梵天には色紙を用いない。

現在の行事と梵天

龍昌寺境内に「行屋」がある。現在は公民館になっており、その一室を行屋として使用している。祭壇には三山の掛け軸と大日如来像を祀る。「神仏一体の神様」で、拝礼時には線香を立て、二礼二拍手一拝を行う。

正五九月の月末の日曜日にそれぞれ「正月行」、「五月行」、「九月行」を行う。３回ともに親梵天１本、子梵天２本、辻梵天３本の計６本の梵天を作る。親梵天、子梵天は３本を１組として供養塚に立てる。辻梵天は悪いものが入らないよう、集落の入り口３カ所に立てる。

三山登拝の近況と梵天

宿坊は養清坊。年１回、３月ころに来訪がある。

三山登拝は数年に一度。前回は平成20年に40名で行った。うち新行が29人、「贈冠（オクリカン・白衣とお金を持っていってもらうと、実際には行かなくても登拝したことになる）」が２名だった。終戦のころ40数軒だった集落が現在では900軒をこえており、参加者を募集するときは新住民にも声をかけている。登拝参加後に、講に入る人もいる。

登拝前に、梵天３本を行屋の前に立て、山から戻ると「お山」（村はずれの供養塚）へ持っていく。前回は登拝の翌年３月に、石を立てて腰梵天を納める「梵天納め」を行った。供養塚の大日如来石像は寛文３年（1663）銘がある。

行人の葬式と梵天

行人の葬式には白い梵天を３本作る。また３尺くらいの竹の杖を作り、墓石の後ろに立てる。「葬式行」という。

型に合わせて垂れ紙を切る。

幣束、サカキ、「カンザシ」を挿す。

垂れ紙を紐に挟む。

「ゴオ（牛王）」を巻く。

「カゴ」を組む。

供養塚に３本の梵天を立てる。親梵天だけ色が入る。

■西青柳（にしあおやぎ）八日講［市原市］

梵天の作り方

以前まとめて入手した和紙を使っている。藁ヅトの切り口を上にし、和紙を巻く。型にあわせて切り、折った垂れ紙を３枚つける。ひも結びは人を象っており、結び目がそれぞれ目・鼻・耳・口・胴・腰・膝・足首だといわれている。胴や腰をあらわすあわじ結びを「唐草」、足首をあらわす叶結びを「石畳」と呼ぶ。藁ヅトの上には、羽黒山・月山・湯殿山の三山を象った山型の紙を挿す。支柱はマダケ。中ほどにマサキの枝をつけ、和紙で巻く。地面に挿すところに四角に切った和紙を敷く。清浄な場所に立てるという意味がある。

現在の行事と梵天

行人が集まる場所は旧養福寺跡地の公民館であり、地蔵菩薩像と三山の掛け軸を祀っている。
毎月８日に「八日講」を行い、「お梵天の由来」と般若心経を唱え、お茶を飲んでいる。２・９月に「辻梵天」の行事を行う。昔は12本の梵天を立てたが、埋め立てなどで状況が変わり、今は６本を立てている。５月には「浜行」を行う。水難者の供養のため、辻梵天より大きな梵天を１本、かつては海べりだったが、現在は運河のようになっている場所のふちに立てている（場所は変わっていない）。腰にシメ（注連縄）をつけて般若心経を唱え、シメを海に流す。

三山登拝の近況と梵天

三山へは一生に一度行くものだと言われてきた。一度行けば良かった。昭和62年を最後に、しばらく誰も行っていない。宿坊は宮田坊だったが廻って来なくなってしばらくたつ。お札も送ってこない。八日講も新しく入る人がなく、３名で行っている。
山へ行く前には１人１本の白梵天を作り、公民館の脇の三山碑の前に立てた。帰ってくるまで１日１回、先輩の行人たちで拝んだ。
供養塚は西青柳と台との共同管理となっており、ここにまつられている大日如来の台座には「奉造立湯殿山大権現御宮」の文字と寛永７年（1630）の年号があって、出羽三山信仰に関わる県内最古の石造物とされている。

行人の葬式と梵天

行人の仲間で梵天を３本作って墓に立て、１組になるようにひごで組む。このときの梵天は、垂れ紙の頭の三角部分を黒くし、また紙の枚数を通常の３枚から４枚に増やす。般若心経を唱える。

和紙を型に合わせて切り、折って行く。

細く切った部分を上から七五三に折り畳む。

紐結びは人を象っている。

左から羽黒山・月山・湯殿山。湯殿山から湯気が上る。

マサキの枝をつける。

西青柳は仏式の拝みを行っている。

和紙を敷いて梵天を立てる。

■北青柳（きたあおやぎ）三山行人［市原市］

梵天の作り方

藁ヅトの切り口を下に、半紙を巻く。B４の上質紙で作った垂れ紙を３枚つけ、頭に紙をかぶせる。これは宝冠をかぶった行人の顔である。白紐で紐結びの飾りをつけ、結び目は眼・耳・鼻・口・心・体の六根をあらわす。頭に挿す山２本と「ヒラヒラ」１本は、月山・羽黒山・湯殿山で、ヒラヒラは湯殿山から噴き出る噴水をあらわしている。マダケの支柱を挿し、支柱の中ほどには湯殿山をあらわす幣束をつけ、水引を結ぶ。最下部の正方形の紙は、大地と梵天を仕切るもので「石突」という。

現在の行事と梵天

「行屋」は公民館内に併設されており、大日如来像、不動明王像などを祀っている。
かつては毎月８日に「八日講」を行っていたが、昭和50年ごろいったん途絶えてしまった。バカガイやハマグリの漁でたくさんお金が入った漁師村だったうえ、昭和34年から始まった埋め立ての保証金が入り、八日講で花札など派手な遊びをして地域からひんしゅくを買ったことも衰えた原因のひとつだった。また登拝も、すっかりお遊びになってしまった。現在は年１回、11月３日に役員が公民館に集まって梵天を６本作り、神社の記念塚と共同墓地の供養塚に３本ずつ立てる。その後、各区の行人で料理屋などにでかけている。梵天の作り方も一度途絶えてしまったため、残っていた古い梵天を参考にし、また西青柳で作り方を学んで再構成した。

三山登拝の近況と梵天

三山へは一生に一度行くもの、そして跡取り息子は必ず行くものだという考えがあり、20歳から30歳くらいの男子で人数がまとまると出かけて行った。三山に行き、次に富士山に行くと一人前だと言われたが、そのように行ったのは昭和の終わりころまでで、その後は役員の代表が先達となり、希望者をとりまとめて連れていくようにしているが、それでも人数が集まらなくなっている。宿坊は養清坊で、毎年３月ころに廻ってくる。その前にお札を送ってくるので、各区の役員が区内の行人に販売する。山へ行く前にはひとり１本の梵天を立てて行った。留守の間、家人が朝「はだし参り」と称し、のどがかわかないよう、食べ物に困らないよう、梵天にお水とおしゃご（生米）をあげに行った。山から帰ってくると、その足で共同墓地の供養塚に行き、剣梵天を納めた。

行人の葬式と梵天

葬式には、行人がささげの煮汁を使わずに作る白いおこわを炊いて、出棺のあとの酒席に出した。このおこわを炊く火をつける際、火の親（三山信仰の親方）が火打ち石を打った。また白い梵天を３本作り、墓に立てた。土葬のころは３本の梵天のほか、墓地のまわりを囲む梵天もあった。

垂れ紙を３枚下げる。

宝冠を冠った行人の顔になる。

数十年前の梵天。

現在の梵天。

墓地の三山塚に梵天を立てる。(Y)

八幡神社境内の三山塚にも梵天を立てる。(Y)

※(Y) は谷島一馬氏撮影。

■今津朝山金蔵院（いまづあさやまこんぞういん）・今津朝山能蔵院（いまづあさやまのうぞういん）出羽三山講［市原市］

梵天の作り方

海に近くマダケがないため、シノダケを用いる。なるべくまっすぐなものを選ぶようにする。曲がった竹だと死者が成仏できず、どこへ行ってしまうかわからないという。また「仏（ぶつ）」のものなのでサカキは使わずマサキの葉を用いる。藁ヅトの切り口は上にする。

（金蔵院）色梵天と白梵天の形は同じ。藁ヅトに半紙を巻き、赤・黄・緑・紫・白の５色の色紙（Ｂ４版）を５枚重ねで縦半分に切り、型にあわせて切り、御幣の形に作って２組ずつつける。白は半紙を用いるが、形は色梵天の垂れ紙と同じ。どれも叶・あわじ・総角結びの紐結びを長く下げる。藁ヅトの頭には白の三角を３本とマサキを挿す。

（能蔵院）色梵天と白梵天の形が異なる。藁ヅトを下から半紙で包むようにし、色梵天では赤・黄・緑・青・紫の５枚重ねの色紙を半分に切り、半分に折って左右に垂れさがるように型にあわせて切ったものを２組、紙紐で縛って下げ、白梵天は白の半紙５枚重ねを４つ折りにして切り、ひとつ開いた状態の垂れ紙を２組下げる。色梵天の藁ヅトの頭には、色紙（赤・黄・紫）の三角３本とマサキを挿し、三角は三山をあらわすが白梵天の頭に挿すものは形が異なる。由来は不明。また白梵天にだけ叶とあわじの紐結びをつける。白梵天は人を象っている。

現在の行事と梵天

今津朝山は延命寺（宿の一部）・金蔵院（内出）・能蔵院（三ヶ郷と宿の一部）の檀家ごとに講が作られている。金蔵院（内出公民館）と能蔵院の「行宿」（三ヶ郷公民館）の双方に三山の幣束を祀る祭壇が設けられ、境内地に大日如来の石像が祀られている。金蔵院の大日如来像は文化10年（1813）造立。また今回の展示にはご参加いただかなかったが、延命寺の大日如来石像は寛文２年（1662）造立である。

（金蔵院）毎月８日に「八日講」を行っていたが、今はやっていない。

（能蔵院）寺の役が終わると「ヨウカッコ（八日講）」に入る。もとは毎月８日の集まりだったが、今は第二日曜日に行宿（現在は三ヶ郷集会所）に集まる。昔は酒を飲んで花札や博打などをやり、ひんしゅくを買ったこともあった。その後一度途絶えかけたが、また人が増え、拝みをして親睦の直会を行っている。また八日講とは別に、一緒に山へ行った同行の人たちでも親睦の集まりがある。

三山登拝の近況と梵天

宿坊は神林で、毎年、順番にひとつの寺の行宿を訪れるので、そこに３つの講の講員が集まる。３年でひとまわりする。三山へは一生に一度は参拝するものとされており、三山へ行った翌年に富士山へ登る習慣があった。今津朝山全体で、行きたいという人がある程度集まるとバスを仕立てて行ったものだが、最近は行っていない。

登拝に先だって行宿と浜に梵天を立てた。浜では年長者に拝んでもらい、これを「お浜入り」と言った。浜へ行くときか浜からの帰りに、井戸の近くで待ち構えていた人たちに水をかけられたが、この水には清めの意味があるとのことだった。出発の日はお宮（宿が鷲宮神社・内出が飯奈里神社・三ヶ郷が春日神社）にお参りして出かける。また留守中は毎朝、妻か母親がお宮にはだし参りに行った。

何度か三山に行き「ボッケ（腰梵天）」を持つ人が多くなると、共同墓地の供養塚に石を立て、「梵天供養」を行った。腰梵天を納めて運ぶ輿をシコという。昭和31年には盛大に行ったので、近隣の村か

ら万灯を引いて、「じゃんじゃんやーれ、おーじゃれ」とはやしながら練りこんだ。またどの家でも、誰が来ても家にあげ、飲み放題でもてなした。梵天供養は生前の仮の葬儀。ボッケは自分の魂で、梵天を供養塚におさめることは、自分の霊をおさめることになる。昭和31年の次は49年に行ったが、このときは近隣に声をかけない「朝飯供養（朝祭）」だった。その後平成23年11月、37年ぶりに記念の石を立てて腰梵天を納める供養を行った。共同墓地の供養塚にひとり１本、146本の白い梵天を立てた。共同墓地の供養塚は今津朝山全体のものである。

行人の葬式と梵天

現在、梵天を作るのは葬式だけになっている。行人の葬式を「ボンテンハギ」または「ハギ」という。それぞれの寺の檀家ごとに分かれて行っており、金蔵院では白い梵天１本と色梵天４本を作る。能蔵院では白い梵天１本と色梵天５本を作る。金蔵院では、まず境内の大日如来の石像に立て、その後に共同墓地へ持っていく。色梵天を供養塚に立て、白い梵天は墓地に立てる。能蔵院では境内に墓地を整備し供養塚も新しく作ったため、この供養塚に色梵天を立てる。お骨が寺の門を入ってくるときに白い梵天を上からかざして迎え、納骨後に墓石の後ろに立てる。

行事の変化

金蔵院では垂れ紙を切るのに目分量で鋏を入れていたが、10年ほど前にステンレス板で型を製作した。

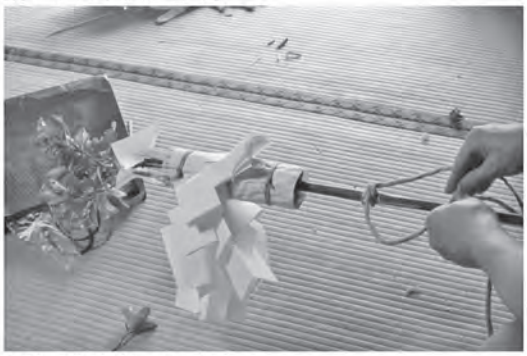
平成23年の梵天供養で供養塚に立った146本の白梵天。

［金蔵院］

5 色の色紙を重ね、型に合わせて切る。

藁ヅトに半紙を巻く。

頭に白の三角 3 本とマサキを挿す。



白梵天と色梵天の形は同じ。

5 本の梵天を大日如来像の周りに立てる。

［延命寺］

延命寺の大日如来像。蓮華に「寛文 2 年」とある。

［能蔵院］

藁ヅト。白梵天用はわずかに細長い。

色梵天の垂れ紙をつける。

白梵天の垂れ紙を型に合わせて切る。

紐結びを作る。

白梵天は人を象った特殊な形。

墓地に立つ白梵天。

■西廣（さいひろ）行人会［市原市］

梵天の作り方

常に白一色の梵天を作る。藁ヅトの切り口は下にする。西の内の和紙１枚を２つ折りにし、さらに２つに折り、型を使って切れ込みを入れ、１回開き、２枚重ねで左右に折り下がるような形になった垂れ紙を３枚、藁ヅトのまわりに巻くようにつける。頭を半紙で包み、紐結びをかける。上部の両脇には耳を作り、長く下げた紐を、あわじ・あわじ・叶の順に結ぶ。紐結びで人の顔をあらわしている。藁ヅトの頭には、三角１本、「花」１本、黒く塗った割竹１本を挿す。下段にサカキと小幣束をつけ、半紙で巻く。部分や結び方の名称、由来は不明。

現在の行事と梵天

年輩者の会である「ヨウカッコ（八日講）」を月１回行っていた。また２月末日に「冬行」、６月末日に「夏行」を行い、３月15日には「天道念仏」を行っていた。冬行、夏行には梵天を３本作り、また天道念仏には大日様をのせたお宮を西廣院の本堂の正面に据え、四方に竹を立てて拝みの行事をした。近年は参加する人が少なくなり途絶えかけたが、ひとつ下の世代で続けていこうということになり、葬式の供養を再開したところである。
行屋は西廣院の境内にあったが、昭和40年代の団地の造成にひっかかったため、西廣院の本堂を使っている。

三山登拝の近況と梵天

近年では昭和48、57、60、平成２年に登拝している。男性だけで行っている。平成23年にも行く予定だったが延期した。三山へ行くと記念に神社の石段などを寄付し、その脇に名前を入れた記念の石を立てる。宿坊は神林。２年に一度、２～３月ころに檀那廻りがある。
登拝のときには朝早く集合し、女性たちが炊き出しをする。事前に山へ行く人ひとりに対して１本ずつの梵天を作り、養老川に立てて身を清める。かつてはお宮（前廣神社）や西廣院本堂の前にもひとり１本ずつの梵天を立てて安全を祈願した。梵天は山へ行く人の身代りである。

行人の葬式と梵天

行人の葬式では、講の仲間がお寺で梵天を３本作る。寺の墓地に納骨にくるのを待って列についていき、梵天を墓地に立てて三山拝詞を唱える。

「定規」に合わせて和紙を切る。

「花」。

紐結びは人の顔を表す。

頭に三角、「花」、黒く塗った割竹を１本ずつ挿す。

半紙を被せ、紐結びをかける。

完成した３本の梵天。

■不入斗（いりやまず）行人会［市原市］

梵天の作り方

梵天を作る前に「ドウバライ（堂祓？）」と称して、お神酒をいただく。
葬式では白３本、ほかの行事では色３本の梵天を作る。藁ヅトは切り口を上にして半紙を巻く。上部に麻紐を縛り、「あわじ」・「叶」・「はた結び（総角結び）」の順に結ぶ。この紐結びは「袈裟組」といい、麻を撚った紐を用いるのが正式。白のオタレは石州半紙を１本の梵天について10枚、４つに切って使う。型紙で切れ込みを入れ、５枚ずつ８組にして上をひねっておく。また色のオタレは赤・黄・緑・青・紫の５色の色紙を各１枚ずつで２組作る。以上を袈裟組の麻紐に挿しこむように下げる。藁ヅトの上には「八角」と呼ぶ星型正八角形に切った紙を２枚重ねてのせ、その上に「大幣束」１本、サカキ、「ハガチ（ムカデの意）」３本、「三角」３本を挿す。マダケの支柱を挿し、その下段に「小幣束」とサカキを結ぶ。３本を竹ヒネの「欄間」で１組に結わえ、中央に「八角」と「大幣束」をつける。支柱の根元に２枚重ねの「八角」を敷き、「三角」を８本立てる。

現在の行事と梵天

「行宿」はもともと村の草分けの家の墓地にあったが、古くなって取り壊した後は、薬王寺の一室を使っている。祭壇には大日如来の厨子と三山の掛け軸を祀っている。
昭和30年ころまでは「八日講」として毎月集まっていたが、現在は６月末に「虫梵天」、10月に「お礼梵天」の行事があり、それぞれ色梵天を３本作り、寺の水神様に立てる。虫梵天は虫よけと豊作祈願、お礼梵天は収穫感謝の行事である。

三山登拝の近況と梵天

三山へは一生に一度行くものとされてきた。山へ行くのは男性だけで、山へ行くと「行人会」へ入る。宿坊は養清坊で３月に檀那廻りに来る。近年は行人会のうち気心の知れた同年代の一部メンバーで三登会という会を作り、４～５年に一度、登拝を行っている。
登拝前に安全祈願のため、寺の水神様を「仮塚」として、色梵天３本を立てる。この色梵天は山から帰ってくると集落のはずれの供養塚に持っていく。また、山へ行った人の人数がまとまると供養塚に腰梵天を埋め、その上に記念の石碑を立てる。

行人の葬式と梵天

行人の仲間が葬列の先頭に立つ。形は色梵天と同じだが白一色に作った梵天３本を墓地に立てる。最近は黄や紫の色紙を入れることもある。

行事の変化

宮本袈裟雄報告（1979）に戦前のあり方として、登拝前に、古行が登拝者全員に梵天を一本ずつ作って与え、登拝者はそれに氏名を記して行屋に立てて出かけたと記される。また八日講では毎月八日に月並みの講が行われ、ほか５月に水神を祀る五穀成就の祈祷、８月に川垢離をとって祈祷する「御礼行」、10月に供養塚の掃除をする「お塚刈」が行われたこと、葬式に５本の梵天を作り、３本を墓に、ほかは供養塚と先祖の墓に立てたことが記されている。

「欄間」の竹ヒネを作る。

型に合わせて垂れ紙を切る。

「大幣束」。

「八角」を２枚重ね，三角を８本挿す。（展示状況）

頭に大幣束１、ハガチ３、三角３、サカキを挿す。

水神様に立つ梵天。（T）

※（T）は時谷暢明氏撮影。

■上高根（かみたかね）敬愛講社［市原市］

梵天の作り方

紙は石州半紙を使う。藁ヅトは切り口が上になるよう、４枚に切れ込みを入れた紙を巻く。３段にかけた紐を「あわび（あわじ）」・「花結び」にし、網のように編んで「袈裟」を作る。石州４枚を四つ折りして切った16枚の垂れ紙を３組下げる。色梵天は白の垂れ紙16枚を２組と赤・黄・緑・紫・白５色の色紙を半分にして切ったものを各色２枚、10枚１組を下げる。藁ヅトの上に飾り切りをした紙をのせ、赤の幣束１本と白三角（煙のような切れ込みあり）２本を挿す。マダケの支柱中段に切れ込みを入れた半紙を巻いてサカキを挿し、紐結びを作る。葬式の３本の梵天は芝を積んだ壇に立て、竹のヒネで１組に結わえ、ヒネの交叉部に小幣束（赤・青）を挿し、支柱の元に割竹３本ずつを挿す。

現在の行事と梵天

「行屋」は江戸時代中期に建てられたもので、祭壇には大日如来坐像と不動明王、阿弥陀如来、弘法大師坐像などが祀られている。

毎月８日（近年は第一日曜日）に「八日講」、20日に年配者だけの集まりとして「二十日講」を行っている。二十日講は昭和47年ころに始まった。２月３日に「節分会」として魔よけの札を摺り講員に配る。７月土用丑の日は「土用行（川垢離）」を行い、行屋脇の水場に色梵天を１本立てる。この日はオツカ掃除や三山登拝の安全祈願も行う。かつては２月の大寒のころに「寒行」があったが、現在は行わない。

三山登拝の近況と梵天

三山に参拝した行人の集まりを敬愛講という。人数が揃えば毎年でも参拝に行くため、何度でも行く人が多い。男性のみ。宿坊は長く西蔵坊だったが平成20年より養清坊。毎年３月ころに檀那廻りに来る。登拝前には「新行（しんぎょう）」の人数分の白梵天と、２回目以上の全員分として１本の色梵天を作り、行屋の三山碑の前に立てて安全祈願をし、また、神社にも参拝する。行屋の梵天には、毎朝留守家族が水をかけにくる。下山後は１週間くらいのうちに腰梵天の「オツカ納め」と「八社参り」を行う。これは、村はずれの「オツカ（供養塚）」に並ぶ供養塔のうち正面の新しい石に行屋の梵天を移し、新行が受けてきた腰梵天を納め、その後、近隣８カ所の行屋を廻るもの。かつては腰梵天がまとまると「梵天供養」を行い、新たな石を立てて納めたが、今は塚に納める場所が設けてあり、行くたびに納める形になっている。

行人の葬式と梵天

葬式の前日に行人が行屋に集まり、葬式梵天を作る。１本の色梵天（オヤ）と２本の白梵天でひと組。当日に埋葬に先だって墓に立てる。

行事の変化

立野晃の記録（1981）によれば、藁ヅトの上にオカシラ１、サンカク３、カラボウ３を挿し、支柱の中ほどにはリョウブと呼ばれる幣束を２本括りつけるとある。また冬行、土用行では１本、三山登拝前にはひとり１本、また葬式では３本の梵天を作るとある。色は特に記されないが、どれも白一色だったように読める。

切込みを入れた紙を巻く。(S) 3段にかけた紐を結ぶ。(S)

頭に飾り切りした紙を被せ、幣束1、三角2、サカキを挿す。(S)

葬式の梵天は芝壇の上に立て、3本を一組に結わえる。元に割竹を3本ずつ立てる。(M)

登拝前の梵天。2回以上参加の全員分の色梵天を中心に、両脇に新行2人の白梵天を立てる。(S)

墓地の後ろに立つ葬式の梵天。(M)

※(S) は島立理子氏、(M) は宮本敬一氏撮影。

■朝生原（あそうばら）講中［市原市］

梵天の作り方

三段の作りになっており、一番上の藁ヅトは、切り口を上に半紙を巻き、紐で縛る。また麻を左縄に撚った紐を結びつけ、叶・あわじ・叶の飾り結びを作る。半紙を10枚ずつ、切込みを入れて折下げるようにし、上をまとめてひねったものを５組作り、紐にねじこむように下げる。頭に半紙をかぶせ、幣束１本、サカキ、三角（縦長）３本、何も挟まない割竹３本を挿す。２段目と３段目は細く切れ込みを入れた半紙を巻き、サカキ、三角３本を挿して麻紐で縛る。また叶・あわじを交互に結んだ飾り結びをつける。

現在の行事と梵天

行屋は青年館に併設されており、大日如来像を祀っている。
毎月８日に「八日講」を行っている。そのうち１・５・９・11月には白い梵天１本を作り、青年館の記念碑の前に立てて礼拝する。

三山登拝の近況と梵天

三山への登拝は、近年は参加者が減少してきたため近隣の黒川、石神地区と合同で行うようになったが、ほぼ毎年行っている。戦後は女性も参加している。宿坊は、昔は石井坊だったが今は三光院。毎年４月に檀那廻りにくる。７月の登拝前に梵天を１本作り、青年館にある朝生原だけの記念碑の前に立てる。留守に残った行人が、月山登拝の時間にあわせて祈祷を行う。かつては三山参拝後、参加者全員で潮垢離と足洗いのために小湊へ行ったが、このとき、出発前に記念碑の前に立てた梵天を持って行き、海に立てた。今は近くの川に立てている。三山へ行くたびに記念碑を立てたり、腰梵天を埋めたりすることはしない。腰梵天は、人により行衣と一緒にしまっていたり、神棚にあげたりしている。

行人の葬式と梵天

葬式では梵天を４本作る。白い梵天３本をひと組にヒゴで結わえ、１本は太い竹を用いて色紙で作り、３本ひと組の梵天のうしろに立てる。３本は出羽三山の印で１本は亡くなった人の霊。梵天を持った行人が葬列の先頭に立ち、墓地に着くと墓の後ろに立てる。49日までは立てておき、あとはその家で処分する。
また朝生原、黒川、石神に戸面を加えた４区で供養塚（籠田原塚）を持っており、ここで３年に一度、４区合同で、３年間に亡くなった行人の供養を行う。塔婆を供養塚に持って行って祈祷し、その塔婆を遺族がそれぞれの墓へ持っていく。

麻紐を左縄に縒って使う。(S)

三山を表す三角は細長い独特の形。(S)

垂れ紙は、紐にねじこむように下げる。(S)

幣束。

三角３本の後ろに何も
挟まない割竹が３本。

飾り結びをつける。(S)

八日講で白梵天を１本作る。

※(S) は薗田晃氏撮影。

■川原井（かわはらい）三山講［袖ケ浦市］

梵天の作り方

藁を折り曲げ、藁ヅトを作る。切り口が下になるようにマダケの支柱を挿す。紙は石州和紙を１本の梵天について１帖（20枚）使い、半分に切り、型にあわせて切れ込みを入れ、40枚の垂れ紙にして藁ヅトに下げる。上から紙をかぶせ、「御幣」１本、サカキ、「三角切紙」３本、「カラ棒」３本を挿す。麻ひもを「アワビ（あわじ）」と「石畳（叶）」に結んだ「袈裟」をかける。

行事と梵天

川原井は砂子田、新田、表場、根澄山にわかれており、新田と表場はもともと講がひとつで光明寺境内の「行屋（大日堂）」に集まっているが、砂子田、根澄山にもそれぞれ行屋があり、講があった。新田・表場と砂子田は宿坊が同じなので、砂子田に行屋がなくなり人も少なくなってからは光明寺の八日講に参加し、三山の登拝も合同で行っている。根澄山は宿坊が違うので一緒に活動することはなかったが、現在ほとんど活動がない状況である。

新田・表場は毎月８日に欠かさず行屋で「八日講」を行っており、特に正月の「初講」には大勢が集まる。昨年までは２人ずつ当番で精進料理を重箱につめて来たが、会費制で料理を購入するように改めた。昔は八日講に行く日は朝から精進料理で、味噌汁に煮干しも使えなかった。今も拝みが終わり料理を広げるときは、大日様の扉を閉めることになっている。７月28日は「お塚刈り」で、供養塚の草刈りや掃除をする。

三山登拝の近況と梵天

三山へはおよそ１年おきに参拝している。長伝坊（三山大愛協会・神林千祥とも）が宿坊。宿坊からは４～５年に１回廻ってくる。正月に毎年お札などを送ってくるので、初講で配る。

３～40年前までは、登拝前にひとり１本ずつの梵天を作り、井戸で水垢離をとって安全を祈願し、帰ってくると川に流したが、今はやっていない。川原井全体の供養塚と部落ごとの供養塚があり、50年くらい前に川原井全体で、何十人分かの腰梵天を埋めて供養し石を立てる「梵天供養」を行い、万灯を作ったり、付き合いの部落が山車を引いてきたり、盛大におまつりをした。その後は砂子田、新田など一緒に山へ行く人たちだけで、ある程度腰梵天が集まると石を立てて納め、供養している。

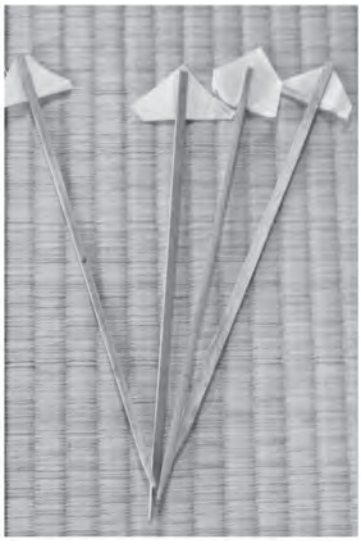
行人の葬式と梵天

行人が亡くなると葬式の日の朝から行衣を着て行屋へ集まり、３本の梵天を作る。土葬のときは墓地のまわりを囲む梵天も作り、あわせて７本（４＋３）、９本（６＋３）などの本数だった。本数の違いは、山へ行った回数などで決まった。

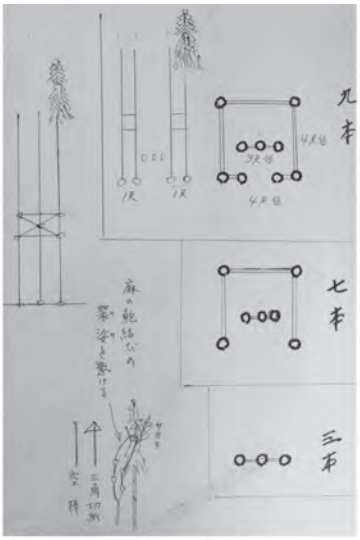
行事の変化

『平岡地区の民俗』（1991）によれば、月並の行のほか１月15日の「寒行」と８月24日の「土用行」があり、行屋の近くの井戸に梵天を１本立て、その井戸で水垢離をとってから行屋におこもりをし、一晩泊って行をしたという。

垂れ紙の型紙。



「三角切紙」の見本。



葬式の梵天の立て方。

割竹を組んで３本の梵天を結わえる。

八日講では囲炉裏に火をおこす。

三角とカラ棒を幣束の周りに挿す。

麻の紐結びは袈裟を表す。

完成した３本の梵天。

■横田成蔵（よこたなりくら）三山講［袖ケ浦市］

梵天の作り方

藁ヅトをつくり、切り口が下になるようにマダケの支柱を挿す。藁ヅトには切れ込みを入れた半紙を巻く。「はかま」といい、２分の１にした半紙を型に合わせて切れ込みを入れ、１本の藁ヅトに２枚巻く。また、半紙を２分の１にして型紙を使って切った「ヒラヒラ（垂れ紙）」を２枚ずつ４組、計８枚下げるようにし、上から紙をかぶせて紐でしばる。頭の上にはサカキ、幣束１本、三角３本を挿す。三角は１枚を黒い紙で作り、羽黒山をあらわす。残り２枚は白で、月山と湯殿山をあらわす。地面には６角形に切った半紙を敷き、頭の上と同じくサカキ、幣束１本、三角３本（黒１・白２）を挿す。

現在の行事と梵天

以前は毎月８日に集まっていたが、今は年２回、７月の三山へ行く前と暮の20日ころに公民館に集まって、白い梵天４本を作る。登拝は近年１年おきになったが、行かない年も、同じ時期に梵天を作る。いずれも３本を供養塚に立て、１本を川へ立てる。川へ立てるのを「流し梵天」といい、それまでツカに立っていた古い梵天も川へ持っていく。これは昔は竹ごと流したが、今は頭の藁の部分だけを流している。

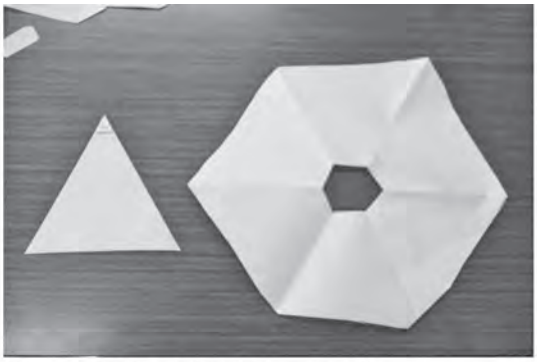
三山登拝の近況と梵天

以前は毎年行っていたが、最近は１年おきになり、横田上宿といっしょに行ったこともあったが、今は成蔵だけで行っている。出羽三山は女性と子供を嫌う山だといわれていたが、15年くらい前からは女性もいっしょに行くようになった。
宿坊は正伝坊。三年に一度、来訪がある。正月に拝んでくれた護摩札が毎年４日に届く。
三山へ行く前に梵天を４本作る。前日夕方、「ツカ（供養塚）」に集まって梵天を３本立てて拝み、デオミキ（出お神酒）を回す。１本はツカの脇の公会堂にしまっておき、山から帰ってくると近くの松川へ立てた。このとき、前年の12月に立て、山へ行く前に下ろした古い梵天の頭も川へ持っていく。「初山」の「ボッケン（腰梵天）」は、ずっと神棚にあげておく。

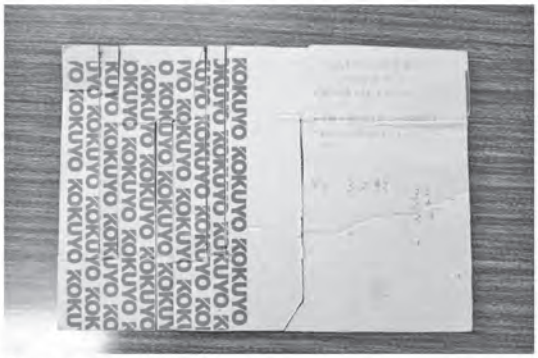
行人の葬式と梵天

行人の葬式にも、白い梵天を４本作り、墓地に３本立て、１本は公会堂においておく。墓に49日まで立てておいて、その後、公会堂の１本とあわせて川に流す。また供養塚にボッケンを納める場所があり、行人が亡くなるとそこにボッケンを入れる。

「はかま」。半紙半分を型に合わせて切る。



梵天の元に敷く六角の紙と、その型。



「ヒラヒラ（垂れ紙）」の型。

手前に次々と折り返し、細い部分を七五三に畳む。

垂れ紙は２枚ずつ上部をよじり。４組を紐に挟む。

幣束を一番前に、次に三角３、奥にサカキを立てる。

塚に梵天を立てて拝む。

流し梵天。古い梵天を倒して新しい梵天を立てる。

■中島（なかじま）敬愛講［木更津市］

梵天の作り方

紙は「国旗」という半紙判の和紙を紙問屋さんから入手して使っている。藁ヅトは切り口が下になるように和紙を巻き、さらに細く切れ込みを入れた「ヒラヒラ」を巻く。オタレは半紙を縦半分にし、２つ折りして型にあわせて切ったもの（半紙２枚重ねの状態で１枚ができあがる）を３枚ずつ３組、計９枚下げる。上から半紙の「シャッポ」をかぶせ、麻紐を結ぶ。頭には三角３本、何もつけない割竹２本を挿す。マダケの支柱を挿し、支柱中ほどに「小梵天」を縛りつける。小梵天は半紙を横半分にし、それをタテ２つ折りにして作る（２枚重ねになる）。

１月の「梵天立て」で海に立てる梵天は、支柱にマダケの７～９メートルの長いものを用意し、枝葉を残したまま使う。また、若衆の襷と同じ布を結びつける。「梵天立て」では、行人の作った幣束を使って梵天製作にあたるのは若い衆（ワカイシュ）であり、海に立てる梵天のほか、モウソウチクを使った大梵天や各家に配る小梵天も作る。

現在の行事と梵天

「月照院」と呼ばれる「行宿」に、寛文７年（1667）に鋳造された大日如来像が祀られている。

毎月８日に八日講の集まりがあるほか、１月に「梵天立て」、２月に「ウラマツリ（水神祭）」、３月に「ヤマンデマチ（愛宕様の祭礼）」、８月に「土用行（施餓鬼とも）」の行事がある。１月の梵天立ては、６地区の若い衆がそれぞれ海に長い梵天を立て、また大梵天（オオボンテン）を辻やヤドの前に立て、小梵天（コボンテン）を各家に配って祝儀を貰うという若い衆中心の行事であるが、梵天につける幣束を行人が作り、また若い衆が海に入っている間、海に向かって祈祷を行う。８月の土用行では４本の梵天を作り、海難供養塔、山王様の三山碑、水神様、小櫃川の昔の水門のところの４カ所に立てる。暮れには正月様や稲荷様の御幣を作り、住民に配布する。

三山登拝の近況と梵天

三山への登拝は希望者がまとまれば、数年に一度の割合で行く。登拝した行人は200名をこえるが、講の活動に参加しているのは年輩者20名ほど。宿坊は春長坊だったが、絶えてしまったため、現在は長伝坊（神林千祥・三山大愛協会とも）。毎年10月末に来訪があり、正月にはお札を送ってくる。

出発の数日前には、氏神の坂戸神社へお参りに行き、行宿でも祈祷した。また山へ登る日は、行人が行宿に詰めて拝む。山王様（日枝神社）に三山碑が４基あるが、昭和34年を最後に立てていない。

行人の葬式と梵天

同行者が湯灌をし、行衣を着せる。梵天を３本作り、１本には上棟式に使う扇や、品物の入った箱をつける。梵天を持って葬列の先頭に立ち、墓所では墓石の背後に梵天を立て、「三山拝詞」や「般若心経」などを唱える。

垂れ紙の型に合わせて線を引き、鋏を入れる。

紐結び。

「小梵天」。

土用行で山王様に梵天を立てる。(SR)

正月七草の早朝に若者が海に梵天を立てる。(N)

(右) 行人の墓に立つ３本の梵天。「ジャ」「ハタ」、墓石前の六角棒、「ベラベラ」は行人ではない人の葬式でも作る。(SY)

※(SR) は島立理子氏、(SY) は篠田芳夫氏, (N) は永沼律朗氏撮影。

■有吉（ありよし）行人講［木更津市］

梵天の作り方

色紙を入れた色梵天１本と白い梵天２本で１組となる。白紙には石州の半紙を用いる。藁を折りまげて藁ヅトを作り、切り口が下になるように半紙を巻く。半紙を５枚重ねでタテ半分に切り、２つ折りし、カタをあてて切れ込みを入れ、垂れ紙を作る。５枚重ねで左右に垂れ下がる形に作ったものを３組下げ、色梵天はこれに赤・黄・オレンジ・緑・紫の色紙５枚１組の垂れ紙を加える。頭に半紙をかぶせ、割竹に三角の紙をつけた「カマ」３本と何もつけない「クワ」３本を挿す。色梵天の頭の中心に「シメ」（幣束）を挿す。マダケをそれぞれの支柱とし、３本をマダケのヒネで１組に結わえる。中心に建前用の扇とサカキをつける。葬式の場合は扇の上下を逆にする。

現在の行事と梵天

「行宿（大日堂）」の祭壇には大日如来像を祀る。この木像には、もともと個人の持仏だったが宝暦年間（1751～64）に地域で疫病が流行したときに出羽三山に背負って参拝し、病魔調伏の祈願をしたという謂れがある。

毎月８日に行宿に集まって「八日講」を行っている。２～３年前までは８の日（８・18・28）の月３回集まった。かつてはいろりの火は夏でもかならず焚き、この火にあたると健康で過ごせるといった。

梵天は年１回、７月に作る。色１本と白２本の計３本１組を「お塚（行人塚）」に立て、お塚の前に張ったしめ縄も新しくする。また正月８日には祭壇の３本の幣束を作り直し、祭壇と行宿入り口のしめ縄を新しくする。

三山登拝の近況と梵天

最近は、地区でまとまって三山に行くほど希望者が集まらなくなった。横田（袖ケ浦市）の神職の方が先達として広い範囲から参加者を募っており、行きたい人はそこに参加している。宿坊は石井坊だったが絶えてしまい、神林になった。今も２年に１度まわってくる。

三山へ行く人があると、行宿の前に白い梵天を１本立てて拝み、デオミキ（出お神酒）で送り出す。行った人の家の入り口には、笹竹を立てて「お注連縄」を張る。帰って来ると梵天を川へ持っていき、「梵天流し」を行う。

行人の葬式と梵天

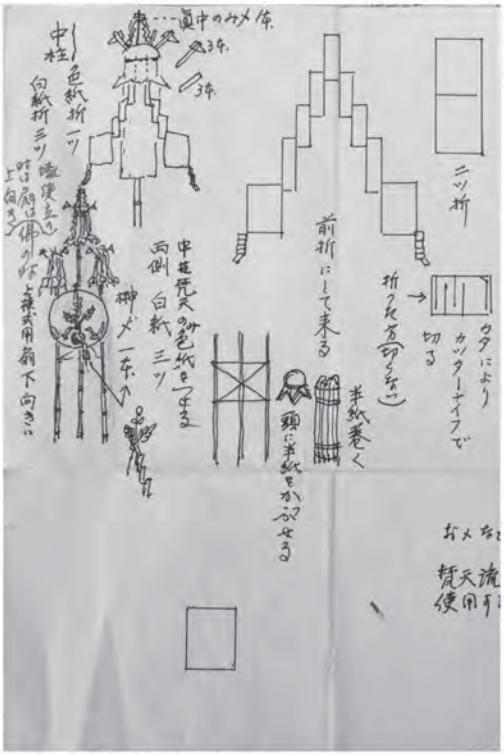
葬式には梵天を作る。７月に作るものと同じく中心の梵天に色紙が入り、両脇は白一色の、３本ひと組である。ただし扇を上下逆にしてつける。

「カマ」「クワ」の柄を作るために竹を割る。

竹のヒネを作る。

3本の梵天をヒネで1組に結わえる。

「中柱」にだけ色紙が入り、頭の中心に幣束が立つ。



梵天の作り方を示したメモ。

塚に梵天を立てる。

■出羽三山西山（にしやま）講［木更津市］

梵天の作り方

紙は石州の半紙を使う。藁ヅトを切り口が下になるようにし、和紙を巻く。黒のしゅろ縄で飾り結びをする（意味は伝えられていない）。４枚の和紙を４つ折りにし、型を当てて切れ込みを入れ、16の垂れになるように切ったものを１組とし、それを３組下げる。頭に三角を３本挿す。マダケの支柱を挿し、中ほどにサカキと幣束をつける。

現在の行事と梵天

毎月８日前後の日曜日に、墓地の「大日堂」に集まり、「行人」を行っている。大日如来像を祀る祭壇の前に出羽三山の掛け軸を掛けて三山拝詞などを拝む。梵天はひと月おきに作っており、白い梵天１本を供養塚に立てる。

三山登拝の近況と梵天

毎年登拝しており、宿坊は神林。一度途絶えかけたが、先達としてまとめ役になる人が地区におり、この方が大きな役割を果たしている。墓地の一隅に大日如来を祀る大日堂と供養塚がある。供養塚には記念碑と大日如来石像を祀っている。
三山へ行くときには梵天を２本作り、１本を供養塚に立て、１本は山へ奉納するために持っていく。記念碑は昭和９年以降立てていなかったが、平成９年に新しく石を立て、初山で受けて来た腰梵天を納めた。

行人の葬式と梵天

葬式では墓に３本の梵天を立て、また直近で亡くなった行人の墓にも１本立てて、仲間入りの印として縄でつなげる。全部を白で作る。３本１組の梵天には扇を逆さにしてつけ、化粧品などの建前の道具が入った箱をつるす。行人仲間で「しのび言」を詠む。

型に合わせて切り，垂れ紙を折る。

3 本のシュロ縄で紐結びを作る。

16 枚で 1 組とした垂れ紙を 3 組下げる。

支柱にサカキと幣束をつける。

供養塚に梵天を立てて拝む。平成 9 年建立の記念碑の前に大日如来像が祀られている。

■小久保（こくぼ）奥の山講社［富津市］

梵天の作り方

藁ヅトは、頭の中心を出して２段になるように縛る。紙は奉書紙を使う。まず12の山型の切れ込みを入れた紙を藁ヅトに巻く。オタレは奉書紙を半分に折り、切れ込みを入れて作る。36枚にする決まりがある。上から「笠」の紙をかぶせ、三角を６本挿す。

現在の行事と梵天

20年ほど前（1989年）に、奥州参りで寄った新潟県村上市の観音寺（仏海上人の即身仏があることで知られている）で、住職から「天狗様（天狗面）」が一緒に千葉に行きたいと言っているといわれ、お連れしてお祀りすることになった。天狗様をお祀りした1989年７月11日を縁日として、八日講をこのときから８日から11日に移し、毎月天狗様の前で祈祷を行っている。いったんは信仰が衰退し、八日講も年に２～３回になっていたが、天狗様で復活した形になった。
毎月11日の祈祷のほか、２月３日の「節分祭」に小久保神明神社で春祈祷と餅撒きを行う。豆のかわりに餅とお金を投げる。また７月１日に浅間山の山開き、10月17日に三山記念碑の祈祷行事、12月22日に冬至の行事を行う。冬至の行事にも数年前までは餅撒きをしていたが、これはやめてしまった。梵天を作る行事はない。

三山登拝の近況と梵天

宿坊は勝木坊。毎年２月３日の節分祭にあわせて廻ってくる。
現在、山へ登るときには梵天を作っていないが、かつて供養の石（記念碑）を立てたときには梵天を作ったようである。

行人の葬式と梵天

行人の葬式の時には白い梵天を１本作り、行衣を着て参列する。梵天は、かつては３本組だったが今は１本。梵天を作る機会は、現在では行人の葬式だけになっている。

藁ヅトは頭が2段になるように縛る。(H)

樹の幹に紐の片方を縛り、強く引き締める。(H)

12に切込みを入れた紙を巻く。(H)

オタレの枚数は36枚。(H)

20年前に観音寺から譲られた天狗面。

節分祭では、三山記念碑の前で餅撒きを行う。

葬式の梵天は、今は1本である。(H)

※(H)は藤平由弘氏撮影。

■刑部（おさかべ）百人講（稲塚（いなつか）区）［長柄町］

梵天の作り方

枝葉のついた真竹を支柱にし、藁を巻き、折り曲げてツトにする。藁の切り口は上になる。下に切れ込みを入れた半紙を巻く。頭にはサカキ３本、幣束３本、割竹３本を挿す。幣束は太陽、割竹は月をあらわすと伝えられている。支柱の中ほどには藁の輪飾りと麻紐の紐結び、幣束１本をつける。地面には半紙を敷いて梵天を挿し、逆三角形をつけた割竹３本を挿す。

現在の行事と梵天

刑部は６区からなり、それぞれに「行屋」があり「八日講」を行っている。稲塚区では、もと宝珠院という寺だったところを行屋として使っており、以前は毎月８日に八日講を行っていたが、今は２・５・９・12月のみ行っている。行屋の祭壇には不動明王をおまつりしており、八日講では祭壇の横に三山の掛け軸をかけ、三山拝詞などを唱えている。

梵天を作るのは２月の「辻切り」で、３本を作り、行屋と集落の入り口、集落のはずれに立てる。悪いものが入ってこないようにという意味がある。

三山登拝と梵天

宿坊は養清坊。毎年３月ころに廻ってくるので役員が対応する。10年ほど前までは、刑部から毎年のように山へ行っていたが、それは刑部全体というより、刑部の６区から、今年はどこ、次はどこと、ある程度区でまとまって行った。近年はしばらく山へ行っていないが、近々行く予定で積立を行っている。昭和45年からは女性も同行している。

三山へ行く前に、行屋に梵天を１本立て、古行人が無事登拝を祈って祈祷した。帰ってくると、刑部全体で持っている三沢の供養塚に梵天を持っていった。昔は記念碑を建てるときに「梵天供養」を盛大に行った。昭和58年が石を立てた最後になっている。

行人の葬式と梵天

15年くらい前までは墓地が３段の階段状になっていて、一番上に行人、次の段に行人以外の男性、下に女性とこどもを埋葬していた。墓石は立てていなかった。その墓地を家ごとの区画にし、墓石を立てられるように改めた。またかつては行人が亡くなると、行人の仲間が梵天を作って行衣を着て見送ったが、それも５年くらい前から行わなくなった。

枝葉のついた竹に藁を巻き付ける。

麻紐の結び。

幣束。

サカキ前方の幣束は太陽を、後方の割竹は月を表す。

半紙を敷いて梵天を立て、逆三角３本を挿す。

支柱に藁の輪、幣束，紐飾りをつける。

行屋の前に立てた梵天。

■蔵持上（くらもちかみ）行堂［長南町］

梵天の作り方

マダケに藁を巻きつけ、折り曲げてツトにする。切り口は上。画仙紙（半切サイズ35×136㎝）を10枚ずつ重ねて切った垂れ紙を108枚、ひもで結んで下げる。「長老」が目分量で切っているが、画仙紙10枚ですべての垂れ紙ができる。ツトの上部には幣束を３本挿す。うち１本の紅白の幣束は建前道具のなかに入っているもの。支柱の中ほどに、建前で使う日の丸扇と、扇とセットの針や櫛など女性の道具を下げる。垂れ紙の108枚は「三山百八社」に因む。

現在の行事と梵天

「行堂」は全応寺の一隅にある。祭壇に祀られている仏像（御神体）は釈迦如来。かつて蔵持の大火で行堂が燃えたが、現在まで燃え残りの炭の形で伝えられている仏像があり、胎内の経木から元禄12年（1699）造立と考えられる。近年は祭壇の扉はあけても、厨子の扉は開けたことがなかった。祭壇も、祝詞をあげ終わるとすぐに閉める。酒を飲むときに開けておいてはいけないことになっている。

行事は１月中旬の大進坊檀那場廻りにあわせての祈祷、４月に「花見」、６月に「マンガ洗い」、７月に奥州参り打ち合わせ、８月「奥州参り」、９月末ころ「札貼り」（108枚の札を周辺の行堂の建物や石などに貼る）、12月の「霜月行」。それぞれ行堂に集まって祈祷と直会を行う。12月はじめの霜月行で１本の梵天を作り、翌年１年間の行事のたびに行堂の前に立てる。またこの日は餅をつき、昔は餅やみかんをこどもたちに配った。また、昭和30年ころまでは、雨乞いの祈祷を頻繁にやっていた。

三山登拝の近況と梵天

三山へは毎年参拝するので、多い人は毎年のように行く。女性も一緒に行っている。三山は五穀豊穣をもたらす百姓の神様であり、また、先祖の供養のために山へ行くと考えている。三山の登拝は、先祖の足跡を踏んで行くもの。赤ちゃんがうまれた家では１年くらい参拝を控えるが、亡くなった人がある家は、誘いあってきてくださいと宿坊からいわれている。宿坊は大進坊で、冬に毎年旦那場廻りに来る。

山へ行く前には、暮に作った梵天を行堂の前に立て、デオミキ（出お神酒）で無事を祈願して出発する。「新行」の腰梵天がある程度集まると石を立てて、腰梵天を納めた。昭和30年に梵天供養をしたときには、６メートルくらいの高さの万灯を田の中に作った。お酒を飲み放題で振る舞ったので、大勢の人が参拝に来た。

行人の葬式と梵天

「行人葬」を頼まれると、行人の仲間は行堂につめて袈裟、宝冠のいでたちで梵天を作り、行堂の墓地へ納骨に来る行列を待つ。行列のあとをついて行き、梵天を墓地に立て、三山の祝詞を拝んで別れのことばを拝む。その後忌中払いの酒席を持つ。葬式の梵天は12月に作るものと同じである。

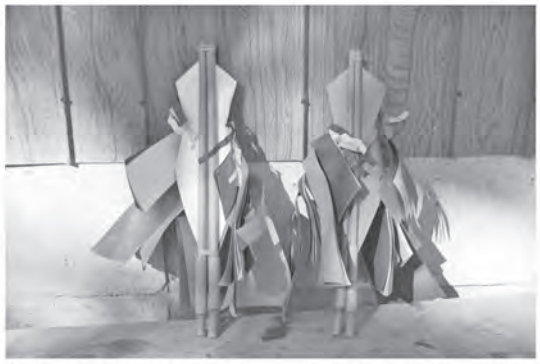
マダケに藁を巻く。

画仙紙 10 枚を重ねて垂れ紙を切る。

垂れ紙はおよそ 10 枚ずつ上をひねっておく。

藁ヅトの紐に垂れ紙を挟み，さらに紐をかける。

建前用の日の丸扇をつける。



祭壇の厨子内に保管されていた五色の幣束。現在、色紙は用いていない。

行堂の前に立つ梵天。

■芝原（しばはら）行堂［長南町］

梵天の作り方

１本のマダケに３本の幣束を三段に縦につける。まず細く切れ込みを入れた半紙をマダケに巻き、そこに幣束を縛り、三山をあらわす３弁の飾り結びをつけるという形である。実際には一番上の幣束はマダケの上の切り口に挿し、２番目の幣束に２カ所飾り結びをつけている。

現在の行事と梵天

芝原（長南町）と森（睦沢町）とは、「八日講」を昔からいっしょに芝原の行堂で行っており、毎月８日である。また１・５・９月の26日には妙楽寺、佐貫の行人も芝原の行堂に集まり、一緒に参拝と直会を行っている。また11月には３日間かけて「行堂のおまつり」を行う（芝原と森）。６日が掃除で７・８日がおまつり。行堂の厨子には大日様・薬師様・観音様が祀られており、その扉をあけ、一晩おこもりをする。厨子の扉をあけるのは年１回、このときだけである。花火をあげ、余興で踊りを踊ったり、昔は子供たちが「梵天納め」に使う神輿を担いで廻ったりもした。八日講などの通常の集まりでは、厨子を閉めたまま三山拝詞などを唱える。厨子の前には神鏡を祀っている。
梵天を作るのは三山へ行く前と行人が亡くなったときで、年間の行事のなかにはない。

三山登拝の近況と梵天

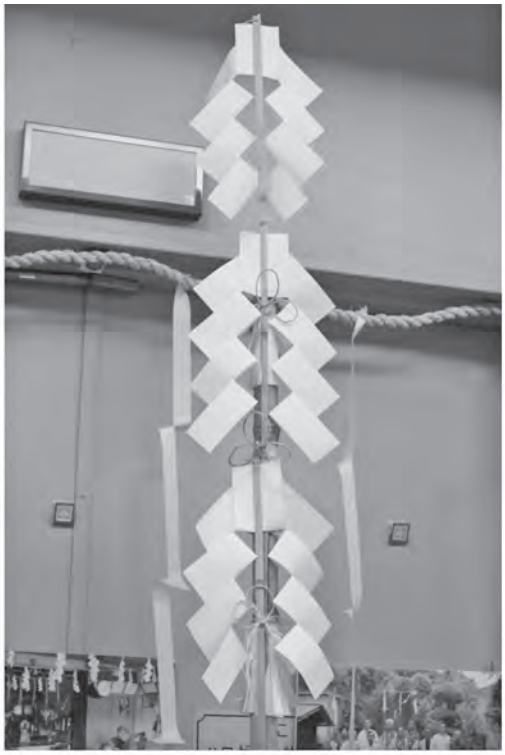
芝原と森は、三山にも毎年合同で行っている。宿坊は大進坊。上之郷（睦沢町）もいっしょに行くことがあるが、上之郷は吉田坊である。三山へ行く前には梵天を４本作り、３本は行堂の前、１本は川のふちに立てる。川に立てるのには祓いの意味がある。
また、初めて山へ行った人の腰梵天がある程度集まると、記念の石を立てて腰梵天を納める。かつて「梵天納め」を行ったころは、男も女も派手な着物にたすきをかけ、白足袋をはき、化粧をし、行堂で一番位が高い人の家から行堂まで、行列でドウコを叩いてゼンゼンゴ踊りを踊ったりしながら練りこんだ。近隣の行堂からも万灯を作って参拝に集まった。

行人の葬式と梵天

行人が亡くなると梵天を１本作ってお墓に持って行く。「しのびのことば」などを詠む特別な次第で葬儀を行う。

芝原行堂。

3弁の紐結びは三山を表す。



縦に並べた3本の幣束も三山を表す。

毎月、参拝のあとに直会の席が設けられる。

■野牛（やぎゅう）出羽三山行人会［茂原市］

梵天の作り方

マダケの支柱に藁を結わえ、折り曲げて藁ヅトにする。藁ヅトの切り口についての決まりはない（現在は下に作っている）。藁ヅトに半紙の幣束を挿す。幣束の本数は、梵天を立てる意味や状況によって違うが、いずれの場合も白一色の半紙を用いている。

現在の行事と梵天

三山に登拝した人たちの会を「行人会」といい、現在31名（22軒）。そのうち年輩者８名で「八日講会」を組織し、行堂で祈祷行事などを行っている。

「八日講」は昨年まで毎月行っていたが、高齢化し、当番に負担がかかることから、正五九（１・５・９月）と十二月の年４回となった。正月は大進坊の来訪に合わせて「初祈祷」と総会、懇親会を行い、５月と９月は行堂で祈祷と懇親会を行う。12月には行堂の祭壇に安置する「三社御幣（三山のご神体）」と梵天１本、しめ縄などを作る。このときの梵天には藁ヅトを上下２段につけ、上には新しく作る７本の幣束を挿し、下には前年の幣束７本を移す。謂れは不明。梵天を行堂近くの小川のほとりに立て、月山の方角を向いて白装束で祈祷を行う。また４月には八日講が主催する花見の小旅行も行っている。

三山登拝の近況と梵天

三山へはおよそ２年おきに行く。30軒ほどの小さな地区なので、近年では台田地区といっしょに登拝している。男性のみの参加で宿坊は大進坊。毎年１月に来訪があり、その日に正月初祈祷と新年会を行っている。

山へ行く前に梵天を１本作る。藁ヅトの上に３本の幣束を立て、下には山へ行く人と八日講（年輩者）の人数分の幣束を挿す。月山へ登る時間にあわせて、先輩の行人が行堂の祭壇で梵天とともに安全を祈願し、また留守の間、家族が「ドウロクジン参り」をして無事を祈った。山から帰ってくると梵天に挿した幣束を神社の記念碑の周りに立てる。

行人の葬式と梵天

行人の葬式では、八日講の会員が主となって朝から行堂に集まり、５本あるいは３本の梵天を作る。１本は長く、ほかは１尺くらい小さく作る。幣束はそれぞれに３本ずつ挿す。墓石の後ろに大きな梵天を立て、４本で（全５本の場合）墓地を囲むようにし、割竹で結わえる。正面には日の丸の丸扇を立てる。白装束の正装で拝む。

竹串の元を削る。

左右のシダを合わせ、上に四角の紙を被せた幣束。

幣束の紙を挟んだ竹串の上部を、こよりで縛る。

川のほとりに梵天を立て、三山の方角に拝礼。

前年の幣束を下段に移し、新しい幣束を上段に。

1年間、梵天を祭壇の脇に祀る。

墓地に立てた5本の梵天。(K)

※(K) は講提供。

■寺崎（てらさき）三山講［睦沢町］

梵天の作り方

マダケに藁を巻き、折りあげて縛り、藁ヅトにする。切り口は上。半紙を巻き、麻ひもで縛る。
石州半紙を半分に折り、切れ込みを入れて３回折下げた垂れ紙を３枚、麻ひもに挟むように下げる。頭には、山をずらした三角を３本、何も挟まない割竹３本を挿す。三角の山をずらすのは、実際の山の形に近づけるためで、何も挟まない割竹は、三山へ登る杖をあらわす。支柱の中ほどに半紙を巻き、小さな垂れ紙を１枚下げる。

現在の行事と梵天

毎月８日に「八日講」を行っている。12月８日に梵天を作り、元旦に供養塚の石の前に３本、井戸の水神様に１本を立てる。これは本来、１月８日に行うものだが、１月の八日講は宿坊の来訪にあわせて行うため、「梵天立て」だけを元旦に行うようになった。また、８月16日に「風祭り」の行事を行う。このときには梵天は作らないが、午前中に行人が拝んで、午後はおばあさんたちの念仏行事があった。今は念仏講がないので行人だけで形ばかりに行っている。
「行堂」は歓喜寺の敷地にあったが、昭和50年ころ、廃寺になった東福寺の敷地に移した。今は地域の「やすらぎの家」（公民館）の一室を行堂として使っており、祭壇には神鏡や金幣などを祀っている。歓喜寺にあった行堂は薄暗く、囲炉裏の火の明かりだけで行を行っていた。そこには大日様が祀られていたようだったが、たびたびの移転で失われたようである。

三山登拝の現状

寺崎は47戸あり、一度でも三山に行った行人は60人くらいになる。三山へは毎年山開きの７月１日にあわせて６月30日から７月１日の日程で行っており、帰りにサクランボ狩りも楽しんでくるのが近年の習慣になっている。参加者は女性が多い。宿坊は大進坊。毎年１月ごろに暦やお札を持って廻ってくる。
山へ行くときは前日の夕方に行堂へ集まり、拝んで、タチオミキ（発ちお神酒）をまわす。梵天は作らない。月山に登る日に留守番の奥さんたちで「ドウロクジン参り」をする。また下山後、初めて山へ行った「初山」の人たちで、近隣の三山の石碑があるところに10カ所くらい、「お礼参り」に行く。初山では「腰ボッケン」などを受けてくるが、石を立てて納めるようなことはせず、亡くなるまで各人で持っている。

行人の葬式と梵天

行人が亡くなると、梵天を４本作る。行人ではない人の葬式はユカンニン（湯灌人）が２人だが、行人の場合は「行人の湯灌人」がひとり加わり、行人との連絡係などを行う。腰ボッケンは魔よけの刃物のかわりに死者の胸にのせ、いっしょに納棺する。梵天は３本を歓喜寺の墓地の入り口にある三山の石に立て、１本を墓標の前に立てる。行人で「しのび言」などを詠む。

実際の山の形に近づけるために三角の頭をずらす。

何も挟まない割竹は、山へ登る杖を表す。

支柱に半紙を巻き、小さな垂れ紙を下げる。

梵天作成の日は、祭壇で祈祷を行う。

垂れ紙は半紙を半分に折って作る。

記念碑に３本、水神様に１本、元旦に立てる。

■金田（かねだ）三山講［長生村］

梵天の作り方

マダケに藁を巻き、折り曲げて藁ヅトにする。下が切り口になるようにし、白または赤の紙を巻き、麻紐で縛る。白い三角をつけた割竹を頭に挿す際に、白半紙の垂れ紙１枚の上部を挿し通すようにして、下げる。それぞれ、支柱の元に「袴をはかせ」（八角形に切った半紙を敷き）、「三幣」（三角の紙を挟んだ小幣３本）を立てる。垂れ紙を切る際、最近ブリキの型を使うようになった。

現在の行事と梵天

毎月８日に「八日講」を行っている。（５月と９月は、農繁期のため、農休日にあわせて行う。）１月１日に「元旦祭」、７月28日に「風祭り」。風祭りの日だけ４本の白梵天を作り、石碑のまわりに立てる。また春と秋の彼岸に先祖の墓参りをする。12月７日、８日は「年取り行」。７日にもち米を持って集まり、水にひやし、８日に餅つきをする。全部で２俵近い餅を搗き、三山の重ね餅を祭壇に飾るほかは、のしもちにして分けて持って帰る。この餅を食べると健康に過ごせるといい、行人がいない家も参加できる。「三山講」のメーンイベントで、餅つきのあとに総会と直会を行う。昔は前の晩から「行堂」に籠もり、暗いうちから井戸で水垢離をとり、そして大勢で臼を囲み、専用の小杵を使って餅をついた。こどもに丸餅とみかんを配った。また、暮れの28日か30日に４部落のうち、「餅当番」と「しめなわ当番」にあたった部落が重ね餅３組としめなわをそれぞれ作って、行堂の祭壇にあげる。

三山登拝の近況と梵天

三山への参拝は毎年行く。10年くらい前から女性も参加するようになった。行人が亡くなると家族がお礼参りに行き、月山や湯殿山で供養をするということが、女性も参加するきっかけだった。宿坊は大進坊。毎年１月中旬に回ってくる。行堂の祭壇には大日如来と神鏡、金幣などを祀っている。
三山参拝の前に「山祝い」として行く人の人数分の梵天を作り、行堂の前の三山の石碑の前に立てる。「新山」の人は白い梵天、２回以上の人は赤い紙を巻いた梵天である。７月28日の風祭りの行事の前に片付ける。三山の石碑は昭和初期のものが１基、平成５年のものが１基。平成５年には何となく立てようという話になり、とりたてて何か理由があった訳ではない。腰梵天は各人で保管しておき、亡くなったときに棺へ納めてもらう。

行人の葬式と梵天

行人が亡くなると、白い梵天を１本作り、また「○○命霊」と神式の敬称をつけた名を記した六尺旗を作る。

行堂の庭で梵天作り。(H)

2回目以上の人は赤。

新山は白。

登拝前、碑の前にひとり1本の梵天を立てる。(H)

年取り行。かまどを3基設営して餅を搗く。

祭壇に3組の重ね餅を供える。

※(H)は長谷川重光氏撮影。

■中ノ原（なかのはら）八日講［一宮町］

梵天の作り方

支柱はマダケ、白紙は西の内を使う。藁ヅトを作り、切り口が下になるように、切れ込みを入れて９枚にした「ビラビラ」を巻き、３弁の花のような「神結び」という紐結びを２つ作る。型紙を用いて切れ込みを入れた垂れ紙を藁ヅトの頭から９枚下げるが、頭の中心に三角の紙をつけた割竹を挿すことによって止める。このとき、９枚の花弁の花のように切った白紙を９枚の垂れ紙の上にかぶせ、その上から三角を挿す。中心に挿した三角の周囲にも９本の三角を挿す。垂れ紙は、色梵天では赤２・青２・黄２・緑１・紫１・白１で作る。
支柱の中ほどにも、切れ込みを入れて９枚にした「ビラビラ」を巻き「神結び」を結ぶ。

現在の行事と梵天

かつては一宮全体でマチもハラも一緒の講だったが、昭和の初めころに中ノ原（十二区）だけが分かれた。中ノ原では20歳前後で伊勢参りに行って、その後伊勢講の集まりを持ち、40歳前後になると出羽三山に行って奥州講を作るという習慣だった。女性は子安講で安房の方で行き、次に大山、最後に善光寺をお参りするという習慣がある。
八日講全体で集まるのは、かつては毎月だった。その後、正五九（１・５・９月）の８日と７月15日の年４回となり、今は年２回、１月８日と７月15日である。７月15日は三山の山開きの日。それぞれ梵天を３本（色１本・白２本）作り、三山の碑の前に立てて拝みをする。また一緒に山へ行った同年代の人たちで月１回、「オウシュッコ（奥州講）」として集会所に集まっている。

三山登拝の近況と梵天

宿坊は神林。２年に１度、来訪がある。集会所の祭壇に三山の神札と幣束３本を祀っており、神林は来訪のたびに幣束を新しくしてくれる。三山は、ある程度同じ年代の人たちで話がまとまると行くもので、直近では５年前になる。三山登拝は一生に一度であり、一緒に行った人たちでオウシュッコを作り、毎月のように集まって親睦を深めている。今、活動中の会が３つある。また、行人全員の会を八日講という。
山へ行く前日に、１人１本ずつの白い梵天を先輩たちが作ってくれて三山碑の前に立てる。石碑は昭和７年に立てたものが１基あり、町から講が分かれたときに立てたものらしいという。梵天は山へ行く人の分身で、藁の部分は頭と同じなので、やたらと燃やしたり捨てたりすることはできない。前回は玉前神社のお焚きあげに持っていって処分した。

行人の葬式と梵天

行人の葬式には八日講の人が、中ノ原全56軒から１人ずつ出る。梵天を色１本、白２本と杖を作り、三山の碑の前に立てて拝みをし、色梵天と杖をお墓に持っていった。葬式を家で行わなくなり、カドオクリもなくなったため、２～３年前に梵天作りも最後になった。

「ビラビラ」と垂れ紙の型紙が見える。

9 枚の色紙をまとめて切る。

3 弁の結びを「神結び」という。

最後に、藁ヅトに支柱を挿す。

頭に垂れ紙を並べ、三角をつけた割竹で止める。

中心が色、両脇が白の 3 本で 1 組。

■小土呂（おどろ）行屋堂［大多喜町］

梵天の作り方

藁を束ね、半紙を巻いて麻ひもで縛り、上下を揃えて切り揃える。頭に三角をつけた割竹を３本挿す。マダケの支柱を挿す。支柱の中ほどにサカキと幣束を麻ひもで縛りつける。

現在の行事と梵天

「行屋堂」の厨子には大日如来像が祀られているが、その脇に三山の掛け軸、三本の幣束を祀る祭壇を設けており、祈祷は祭壇の前で行っている。

１月に大進坊が来る日にあわせて「初行」を行う。春と秋の彼岸には念仏講といっしょに清掃や祈祷の行事を行う。７月に三山登拝。12月８日の「暮行」で梵天を３本作り、行屋堂の前の三山碑、行屋堂の奥の行人塚、井戸の脇にあった水神様に立て、祭壇や三山碑のしめ縄を新しくする。水神様はしばらく前に井戸を埋めた際、行屋堂の前に移した。昭和30年ころまでの暮行は、餅をついてお汁粉を作り、こどもたちが丸餅やみかんをもらいに来て、賑やかだった。

三山登拝の近況と梵天

昭和40年ごろにいったん途絶えたが熱心な方の尽力で復活した経緯がある。山へは泉水（大多喜町）や横山（同）と一緒に、毎年行っている。宿坊は大進坊。毎年正月に旦那場廻りに来る。

山へ行くときに梵天を作ることはないが、行屋堂の墓地の一番上にある行人塚に、留守の間中、家族が毎日お神酒とオサゴ（お米）をあげる。

行人の葬式と梵天

行衣を着せて送るだけで、特別なことはしない。

藁ゾトに、ワラの根元だけを使う。

割竹を作る。

三角を３本挿す。

支柱にサカキと幣束を縛る。

できあがった梵天。

暮行。三山碑にしめ縄を張り、梵天を立てる。

33地区の梵天－作成の機会とその形態－

No.	講　名	梵天作成の機会				白紙の種類	色紙の使用			藁ゾトの切り口	飾結びの有無	型紙使用	宿坊
		行	登拝前	葬式	梵天供養		行	登拝前	葬式				
1	吉橋花輪区（八千代市）	3月天道念仏（色5・白1）	×	○（色4） 旧行	－	半紙	○	－	○旧行	下	×	×	（西蔵坊）
2	勝田出羽三山講（八千代市）	3月天道念仏（色5・白1）	×	○（不明） 旧行	－	半紙	○	－	不明	下	×	×	（長慶坊）
3	上志津八日講（佐倉市）	1・5・9月（色5・白1）	×	○（色4） 旧行	－	半紙	○	－	○旧行	下	×	×	神林坊
4	木野子奥州講（佐倉市）	7月（白5）	×	○（白5）	－	半紙	×	－	×	下	×	×	林坊→生田坊
5	内黒田出羽三山講（四街道市）	3・9月（白7）	×	○（色） 旧行	－	半紙	×	－	○旧行	下	×	○	神林坊
6	栗山出羽三山講（四街道市）	1・8月（白5）	×	×	－	半紙	×	－	－	下	×	×	神林坊
7	下志津新田出羽三山講（四街道市）	1・4・7・11月 梵天は4月（白3・色5）	×	○（白3・色5） 旧行	－	半紙	○	－	○旧行	下	×	×	神林坊
8	南柏井出羽三山講（千葉市）	3月天道念仏（色5・白1）	×	○（白5） 旧行	－	半紙	○	－	×旧行	下	×	×	三光院
9	大森町出羽三山講（千葉市）	2月天道念仏（色4）・8月（色3）	×	○（色4） 旧行	○（白3）	半紙（梵天供養は奉書紙）	○	－	○旧行	下	×	×	神林坊
10	南生実町出羽三山講（千葉市）	8月（白1）	×	○（白1）	○	半紙	×	－	×	下	×	×	神林坊
11	出羽三山八幡敬愛講（市原市）	毎月 梵天は1・5・9月（白3）	○ （白・ひとり1本）	○（白3）	○	奉書紙	×	×	×	上	○	○	正伝坊
12	飯沼行人講（市原市）	1・5・9月 （色1・白2＋白3）	○ （色1・白2）	○（白3）	○	石州半紙	○	○	×	上	×	○	養清坊
13	西青柳八日講（市原市）	毎月 梵天は2・9月（白6）・5月（白1）	○ （白・ひとり1本） 旧行	○（白3）	○	和紙（不明）	×	×旧行	×	上	○	○	宮田坊
14	北青柳三山行人（市原市）	11月（白3×2）	○ （白・ひとり1本） 旧行	○（白3） 旧行	○	コピー用紙	×	×旧行	×旧行	下	○	○	養清坊
15	今津朝山金蔵院（市原市）	行わない	○（詳細不明） 旧行	○（白1・色4）	○	半紙	－	×旧行	○	上	○	○	神林坊
	今津朝山能蔵院出羽三山講（市原市）	毎月 梵天は作らない	○（詳細不明） 旧行	○（白1・色5）	○	半紙	－	×旧行	○	上	○	○	神林坊
16	西廣行人会（市原市）	毎月（旧行） 梵天は2・6月（白3）・3月に天道念仏	○ （白・ひとり1本）	○（白3）	○	西の内	×	×	×	下	○	○	神林坊
17	不入斗行人会（市原市）	6・10月（色3）	○（色3）	○（白3）	○	石州半紙	○	○	×	上	○	○	養清坊
18	上高根敬愛講社（市原市）	毎月 梵天は7月（色1）	○ （新行分は白・ひとり1本＋色1）	○（色1・白2）	○	石州半紙	○	○	○	上	○	○	西蔵坊→養清坊
19	朝生原講中（市原市）	毎月 梵天は1･5･9･11月(白1)	○（白1）	○（色1・白3）	○	半紙	×	×	○	上	○	○	石井坊→三光院
20	川原井三山講（袖ケ浦市）	毎月 梵天は作らない	○ （白・ひとり1本） 旧行	○（白3）	○	石州半紙	－	×	×	下	○	○	長伝坊
21	横田成蔵三山講（袖ケ浦市）	7・12月（白3＋1）	○（白3＋1）	○（白3＋1）	－	半紙	×	×	×	下	×	○	正伝坊
22	中島敬愛講（木更津市）	毎月 梵天は1月（本文のとおり）・8月（白4）	×	○（白3）	－	半紙「国旗」	×	－	×	下	×	○	春長坊→長伝坊
23	有吉行人講（木更津市）	毎月 梵天は7月（色1・白2）	○（白1）	○（色1・白2）	－	石州半紙	○	×	○	下	×	○	石井坊→神林坊
24	出羽三山西山講（木更津市）	毎月 梵天は隔月（白1）	○（白1）	○（白3＋1）	－	石州半紙	×	×	×	下	○	○	神林坊
25	小久保奥の山講社（富津市）	毎月 梵天は作らない	×	○（白1）	－	奉書紙	－	－	×	下	×	×	勝木坊
26	刑部百人講・稲塚区（長柄町）	2・5・9・11月 梵天は2月（白3）	○（白1）	○（白1） 旧行	○	半紙	×	×	×旧行	上	○	×	養清坊
27	蔵持上行堂（長南町）	1・4・6・12月 梵天は12月（白1）	○（白1）	○（白1）	○	画仙紙（半切）	×	×	×	上	×	×	大進坊
28	芝原行堂（長南町）	毎月 梵天は作らない	○（白3＋1）	○（白1）	○		－	×	×	－	×	×	大進坊
29	野牛出羽三山行人会（茂原市）	1・5・9・12月 梵天は12月（白1）	○（白1）	○（白5）	－	半紙	×	×	×	下	×	×	大進坊
30	寺崎三山講（睦沢町）	毎月 梵天は12月（白3＋1）	×	○（白3＋1）	－	石州半紙	×	×	×	上	×	×	大進坊
31	金田三山講（長生村）	毎月 7月（白4）	○ （ひとり1本・新行は白・他は赤）	○（白1）	－	半紙	－	○	×	下	×	×	大進坊
32	中ノ原八日講（一宮町）	1・7月（色1・白2）	○ （白・ひとり1本）	○（色１・白2）	－	西の内	○	×	○	下	○	○	神林坊
33	小土呂行屋堂（大多喜町）	1・3・9・12月 梵天は12月（白3）	×	×	－	半紙	×	－	－	－	×	×	大進坊

補足説明

1　行を年に何度か行い、梵天を作る場合と作らない場合があるときは、上に行を行う月、下に梵天を作る月を記している。

2　梵天供養は平成7年に南生実町で行われたことが特記されるが、「大供養」はほとんどの場所で昭和30年代を最後に行われていない。
梵天供養では、その地区が万燈や梵天を作成するだけでなく、つきあい村も万燈・梵天を持って参加したと聞く。また近隣地区を招待せずに地区だけで略式で行う「朝飯供養」という方法もあった。今津朝山ではことし（平成23年）11月、剣梵天を埋葬する全員分、1人1本の白梵天が作成され、供養塚のまわりに立てられた。近年では山へ行く都度、初めて登拝した人の剣梵天を記念碑の元に埋めてしまうところもある。
今回は梵天供養の詳細を地区ごとに調べるにいたらず、かつて梵天供養をしたことが明らかな地区を○で示すにとどまる。